

平成9年度

# 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

大中松円服桂  
ノ原護部見  
桷茶谷寺  
遺屋田遺古遺  
跡跡跡群群  
遺遺跡墳跡

1998

鳥取市教育委員会

## 序 文

鳥取市は海・山・大砂丘など豊かな自然環境に恵まれた山陰東部の中核都市として発展してまいりました。現在市内には数多くの遺跡が知られておりますが、全国的な近年の各種開発事業の増加とともにその取り扱いが重要課題となっております。もともと埋蔵文化財は、先人の生活を知る上で欠くべからざるものと言われてまいりましたが、特に環日本海交流が叫ばれる今日、先人たちの知恵・交流を窺い知ることは、これから的生活・交流等に必ずや役立つ市民の貴重な財産となりましょう。このような認識のもと鳥取市教育委員会では開発と文化財の共存を図るべく各関係機関の指導を得るとともに市民の皆様の深いご理解をいただきながら埋蔵文化財調査事業を進めております。

さてここに報告いたします大楠遺跡、中ノ茶屋遺跡、松原谷田遺跡、円護寺遺跡群、服部古墳群、桂見遺跡群の発掘調査事業も地権者の方々をはじめとする関係各位のご協力によって無事所期の目的を果たし、大きな成果を得て報告書刊行のはこびとなりました。

ささやかな冊子ではありますが、市民の皆様ならびに関係の皆様のご利用に供していただければ幸いです。

平成10年3月

鳥取市教育委員会  
教育長 田中哲夫

## 例　　言

1. 本書は、平成9年度に国・県の補助金を得て鳥取市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 調査を実施した遺跡は大楕遺跡、中ノ茶屋遺跡、松原谷田遺跡、円護寺遺跡群、服部古墳群、桂見遺跡群である。
3. 本書における遺構の略記号として、SK（土坑・土壙）、SD（溝状遺構）、P（ピット）を用いた。
4. 本書に用いた方位は磁北を示す。また、レベル(H)は海拔標高であるがいくつかのトレンチについては任意のレベルを用いている。
5. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は鳥取市教育委員会に保管されている。
6. 現地調査から本書の作成にあたっては、多くの方々から指導・助言並びに協力をいただいた。厚く感謝いたします。
7. 発掘調査の体制は下記のとおりである。

発掘調査主体　　鳥取市教育委員会  
事務局　　　　鳥取市教育委員会文化課  
調査担当者　　平川　誠・山田真宏・谷口恭子

# 本文目次

序文  
例言  
目次

Iはじめに	
1. 発掘調査の契機と調査の目的	1
2. 発掘調査の経過	1
II大楠遺跡	
1. 遺跡の位置と環境	3
2. 発掘調査の概要	3
III中ノ茶屋遺跡	
1. 遺跡の位置と環境	8
2. 発掘調査の概要	8
IV松原谷田遺跡	
1. 遺跡の位置と環境	10
2. 発掘調査の概要	11
V円護寺遺跡群	
1. 遺跡の位置と環境	13
2. 発掘調査の概要	13
VI服部古墳群	
1. 遺跡の位置と環境	19
2. 発掘調査の概要	19
VII桂見遺跡群	
1. 遺跡の位置と環境	21
2. 発掘調査の概要	21
VIIIおわりに	24

写真図版  
報告書抄録

## 挿 図 目 次

第1図	調査地周辺遺跡分布図	2
第2図	大柄遺跡トレンチ配置図	3
第3図	大柄遺跡第1トレンチ実測図	4
第4図	大柄遺跡第2トレンチ実測図	5
第5図	大柄遺跡第3トレンチ実測図	5
第6図	大柄遺跡第4トレンチ実測図	6
第7図	大柄遺跡第5トレンチ実測図	6
第8図	大柄遺跡出土遺物実測図	7
第9図	中ノ茶屋遺跡トレンチ配置図	8
第10図	中ノ茶屋遺跡第1トレンチ実測図	9
第11図	中ノ茶屋遺跡第2トレンチ実測図	9
第12図	中ノ茶屋遺跡第3トレンチ実測図	10
第13図	松原谷田遺跡トレンチ配置図	11
第14図	松原谷田遺跡 第1・第2・第3・第4トレンチ実測図	12
第15図	円護寺遺跡群トレンチ配置図	13
第16図	円護寺遺跡群第1トレンチ実測図	14
第17図	円護寺遺跡群第2トレンチ実測図	14
第18図	円護寺遺跡群第3トレンチ実測図	15
第19図	円護寺遺跡群第4トレンチ実測図	15
第20図	円護寺遺跡群第5トレンチ実測図	16
第21図	円護寺遺跡群第6トレンチ実測図	16
第22図	円護寺遺跡群 第7・第8・第9・第10トレンチ実測図	17
第23図	円護寺遺跡群第11・第12・第13・ 第14・第15・第16トレンチ実測図	18
第24図	服部古墳群トレンチ配置図	20
第25図	服部古墳群第1・第2トレンチ実測図	20
第26図	桂見遺跡群トレンチ配置図	21
第27図	桂見遺跡群 第1・第2・第3・第4トレンチ実測図	22
第28図	桂見遺跡群第5・第6トレンチ・ A断面・B断面実測図	23

## 図 版 目 次

図版1	1. 大柄遺跡 調査地遠景（南東から）
	2. 同 第1トレンチ（東から）
	3. 同 第2トレンチ（南から）
	4. 同 第3トレンチ（北東から）
	5. 同 第4トレンチ（南東から）
	6. 同 第5トレンチ（南西から）
	7. 中ノ茶屋遺跡調査地近景（南西から）
	8. 同 第1トレンチ（北から）
図版2	1. 中ノ茶屋遺跡第2トレンチ（北から）
	2. 同 第3トレンチ（南東から）
	3. 松原谷田遺跡調査地遠景（南西から）
	4. 同 第1トレンチ（南東から）
	5. 同 第2トレンチ（北東から）
	6. 同 第3トレンチ（南から）
	7. 同 第4トレンチ（北西から）
	8. 円護寺遺跡群調査地遠景（南東から）
図版3	1. 円護寺遺跡群第1トレンチ（西から）
	2. 同 第2トレンチ（西から）
	3. 同 第3トレンチ壁断面（南東から）
	4. 同 第4トレンチ（北西から）
	5. 同 第5トレンチ（北東から）
	6. 同 第6トレンチ壁断面（南西から）
	7. 同 第7トレンチ壁断面（西から）
	8. 同 第8トレンチ（北東から）

図版4	1. 円護寺遺跡群第9トレンチ壁断面 (北西から)
	2. 同 第10トレンチ壁断面（南西から）
	3. 同 第11トレンチ（南西から）
	4. 同 第12トレンチ（北西から）
	5. 同 第13トレンチ（南東から）
	6. 同 第14トレンチ（南西から）
	7. 同 第15トレンチ（南東から）
	8. 同 第16トレンチ壁断面（北東から）
図版5	1. 服部古墳群調査地遠景（北から）
	2. 同 第1トレンチ壁断面（南東から）
	3. 同 第2トレンチ壁断面（南西から）
	4. 桂見遺跡群調査地遠景（北から）
	5. 同 第1トレンチ（南西から）
	6. 同 第2トレンチ（南東から）
	7. 同 第3トレンチ〔部分〕 (南東から)
	8. 同 第4トレンチ壁断面（北東から）
図版6	1. 桂見遺跡群第5トレンチ壁断面 (北東から)
	2. 同 第6トレンチ壁断面（南東から）
	3. 同 A断面〔部分〕（南東から）
	4. 同 B断面（南東から）
	5. 大柄遺跡第1トレンチ出土遺物
	6. 円護寺遺跡群第1トレンチ SK-01出土遺物

# I は じ め に

## 1. 発掘調査の契機と調査の目的

鳥取市は、鳥取県の東部に位置し面積239万m<sup>2</sup>、人口14万5千人を擁する山陰の中核都市である。県庁所在地として政治・経済・文化の中心的な役割を担っている。北方には鳥取砂丘そして日本海が広がり、市の中央部を南から北へと千代川が流れている。市域の中心は、千代川の沖積作用によって形成された鳥取平野が占めており、平野の周辺部は丘陵地となっている。近年まで平野部は主として水田として利用され、丘陵地では梨を中心とする果樹栽培が行われてきた。しかし、近年は企業進出による工業用地や住宅団地の造成等によって土地利用の変化が著しい。

肥沃な鳥取平野は、原始・古代から重要な生産基盤として人々の生活を支えると共に交通の要所としても重要な位置を占め、政治・経済・文化の中心として現在に至っている。このように恵まれた地理条件を背景に鳥取市内には、数多くの遺跡が残されている。遺跡は各時代にわたり、これまでの遺跡分布調査によって二千ヶ所を超える古墳、遺物散布地等が確認されている。このため各種開発事業との調整が必要となる遺跡も近年増加の一途をたどっている。今回報告する大楠遺跡（A地区）、大楠遺跡（B地区）、中ノ茶屋遺跡、松原谷田遺跡、円護寺遺跡群、服部古墳群、桂見遺跡群もそれぞれ上水道タンク建設、福祉施設建設、福祉施設建設、保養施設拡張、道路整備、道路建設、道路整備の開発事業が計画され事前に協議を受けたものである。それぞれの遺跡とも、開発との円滑な調整に必要な具体的な資料が少ないため、各遺跡の範囲、遺構・遺物の有無と埋蔵状況、遺跡の性格等の詳細な資料を得ることを目的として発掘を実施した。

## 2. 発掘調査の経過

発掘調査は、各調査区ともトレーニングによる遺構及び遺物の包含層の確認に主眼をおいて大楠遺跡（A地区）から着手し、その後大楠遺跡（B地区）、中ノ茶屋遺跡、松原谷田遺跡、円護寺遺跡群、服部古墳群、桂見遺跡群と順次実施した。なお円護寺遺跡群については、諸準備のため二回に分けて実施した。

大楠遺跡（A地区）は平成9年9月4日から同月12日まで、設定した2本のトレーニングについて調査を行った。調査面積は54.4m<sup>2</sup>である。大楠遺跡（B地区）は9月12日から同月30日まで設定した3本のトレーニングについて調査を行った。調査面積は75m<sup>2</sup>である。

中ノ茶屋遺跡は10月1日から同月15日まで、設定した3本のトレーニングについて調査を行った。調査面積は75.0m<sup>2</sup>である。

松原谷田遺跡は11月17日から12月1日まで、設定した4本のトレーニングについて調査を行った。調査面積は36.6m<sup>2</sup>である。

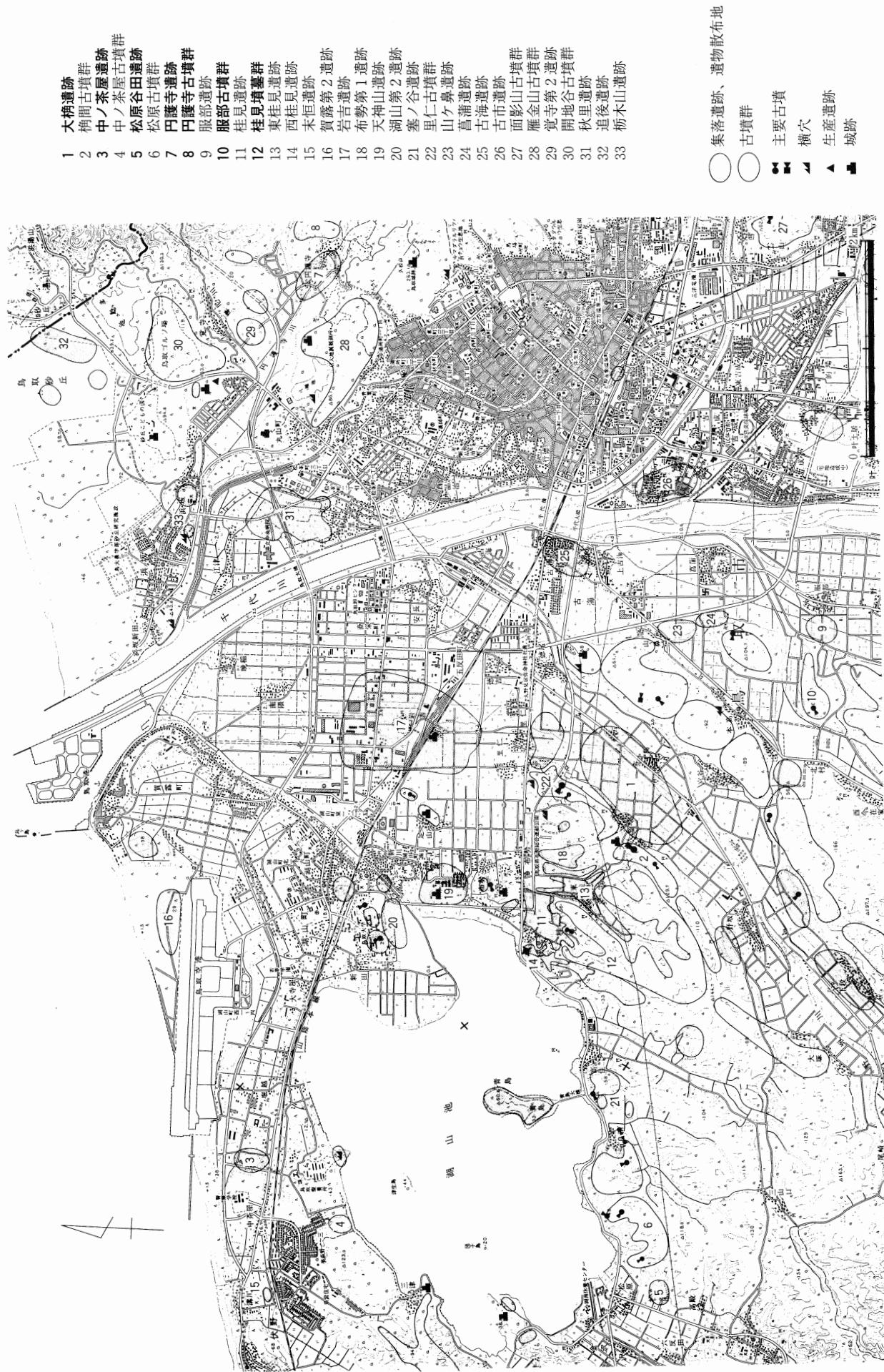
円護寺遺跡群は12月8日から平成10年1月30日、2月20日から同月27日まで、設定した16本のトレーニングについて調査を行った。調査面積は275.0m<sup>2</sup>である。

服部古墳群は2月5日から2月6日まで、設定した2本のトレーニングについて調査を行った。調査面積は14.6m<sup>2</sup>である。

桂見遺跡群は2月10日から同月19日まで、設定した6本のトレーニングについて調査を行った。調査面積は33.7m<sup>2</sup>である。

以上6遺跡の調査面積の総計は564.3m<sup>2</sup>となる。なお、トレーニングはオープン掘削の為、安全性を考慮し段掘りにするなどの配慮をした。このため断面図は同一方向の壁面を合成したものもある。整理作業・報告書作成については現地調査時に着手し調査終了後まで実施した。

第1図 調査地周辺遺跡分布図



## II 大 桟 遺 跡

### 1. 遺跡の位置と環境

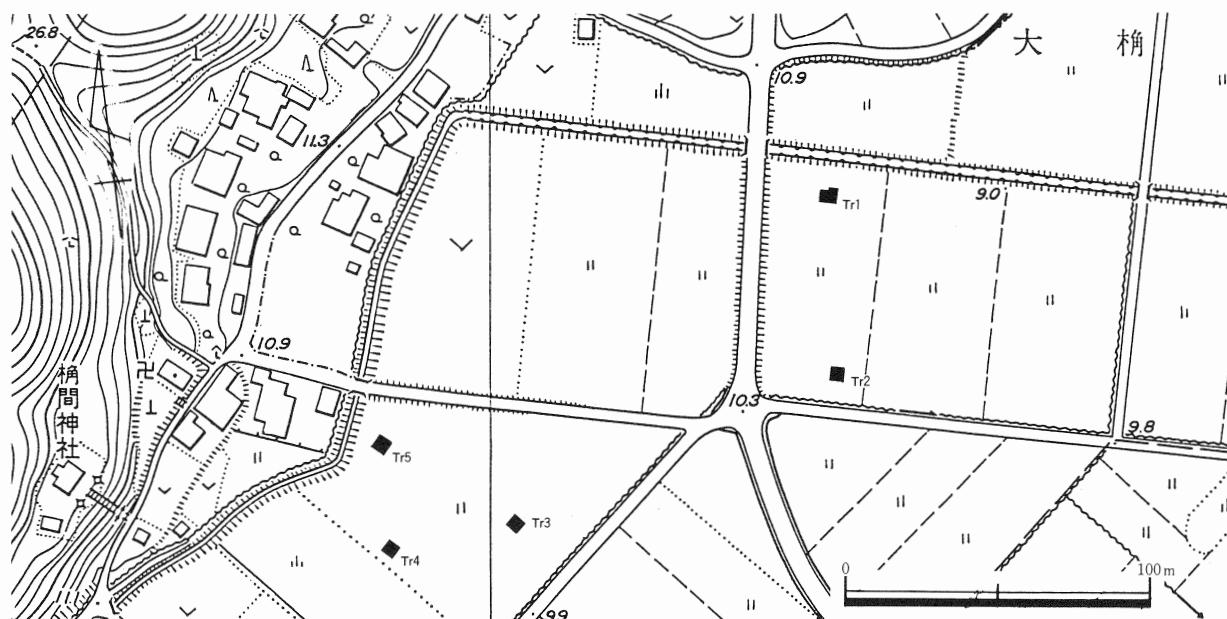
大柵遺跡は鳥取市大柵地内に所在し、JR鳥取駅の西約4km、千代川の主支流である野坂川の中下流域に広がり東西は低丘陵に挟まれる。野坂川は改修以前は幾度も流路を変更しており遺跡はこれら新旧の河道に挟まれた島集落を中心とした扇状地上と大柵を中心とした河岸段丘上に立地している。周辺の遺跡をみてみると、縄文時代前期末が初源の桂見遺跡を筆頭に湖山池南東岸に遺跡が集中し、後期後半から晩期にかけて自然堤防上へ遺跡が進出するようになるが、大柵遺跡でも表採遺物として晩期の土器がわずかながら出土している。弥生時代に入って千代水平野の微高地に立地する岩吉遺跡は鳥取平野で最初に稻作を導入した拠点集落と考えられており、中期後葉以降周辺地域へ分村していくその中に大柵遺跡も含まれていたとみられる。後期になると遺跡の数は飛躍的に増加し引き続き古墳時代へと営まれていく。大柵遺跡ではこれまで行われた二度の調査で弥生時代中期後葉の土器が出土し、後期前半の土坑をはじめ後期後半の竪穴住居の他、貯蔵穴状土坑が多数検出されている。また古墳時代では前期、中期の竪穴住居をはじめ土坑や溝を数多く検出している。こうして弥生時代後期になると湖山池周辺では墳丘墓が次々に造営され、古墳時代に入っても引き続き桂見古墳群を中心として展開する。中期になって野坂川流域に首長墓として前方後円墳である里仁29号墳、柵間1号墳、前方後方墳の古海36号墳が継起的に築造され、後期になると湖山池周辺で小規模な前方後円墳も数多く作られるようになる。律令体制下、この地域は因幡国高草郡に組み込まれ東大寺領高庭庄として開発が進められた。遺跡の北側の丘陵を越えると1.5kmで湖山池岸に達し、1km南西に古代山陰道と考えられる街道が通っており、比較的交通・交易の便が良い立地であるといえ、大柵遺跡ではこの時期の遺物がわずかながら出土している。

### 2. 発掘調査の概要

#### 大柵遺跡（A地区）

調査対象地は、畑として利用されている段丘状の微高地から7m程南に離れた平野部にあたる。周辺は昭和50年代初めの圃場整備によって区画された水田が広がり、それ以前の川筋もU字ブロックによって流路が一部変更となっている。水田として利用されていた調査対象地に貯水タンク及び管理棟施設が建設された場合、その影響が大きく及ぶとみられる箇所にトレーンチ計2本を設定した。

**第1トレーンチ（Tr-1）** 調査対象地の北部に当初5×5m（25m<sup>2</sup>）を設定したが、掘り下げによる壁面崩落のため29.38m<sup>2</sup>のトレーンチとなった。調査前の標高は8.82mを測る。調査の結果、明瞭な遺構は認



第2図 大柵遺跡トレーンチ配置図

められなかつたが、客土中および第4～7層（標高8.01～8.54m）で少量ながら弥生土器、土師器、須恵器の細片、第8～10層（標高7.45～8.05m）中の標高7.61～8.02mで平面帶状（北西～南東方向）に縄文土器が出土した。破片数100点前後（8個体確認）あり、浅鉢（第8図8）のように比較的まとまって出土したものもある。なお標高7.36m以下については多量の湧水のため掘り下げを断念した。

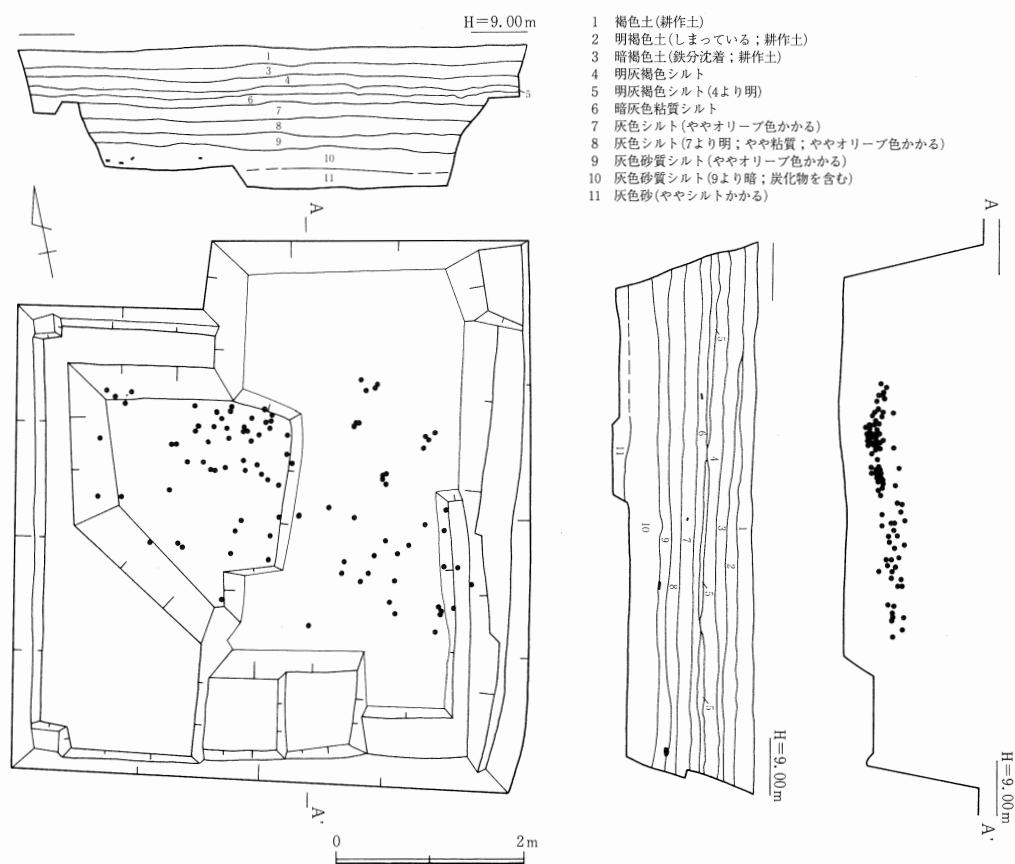
**第2トレンチ（Tr-2）** 第1トレンチの南に設定した5×5mのトレンチである。調査前の標高は8.84mを測る。調査の結果、客土中から須恵器、陶磁器、瓦等の破片、耕作土下の圃場整備の際のものとみられる搅乱が認められた。また、第17層以下（標高8.01m）で旧流路とみられる土層の堆積が認められ、磨滅した土器細片1点と板状等の木製品、自然木がわずかに出土した。

#### 大柄遺跡（B地区）

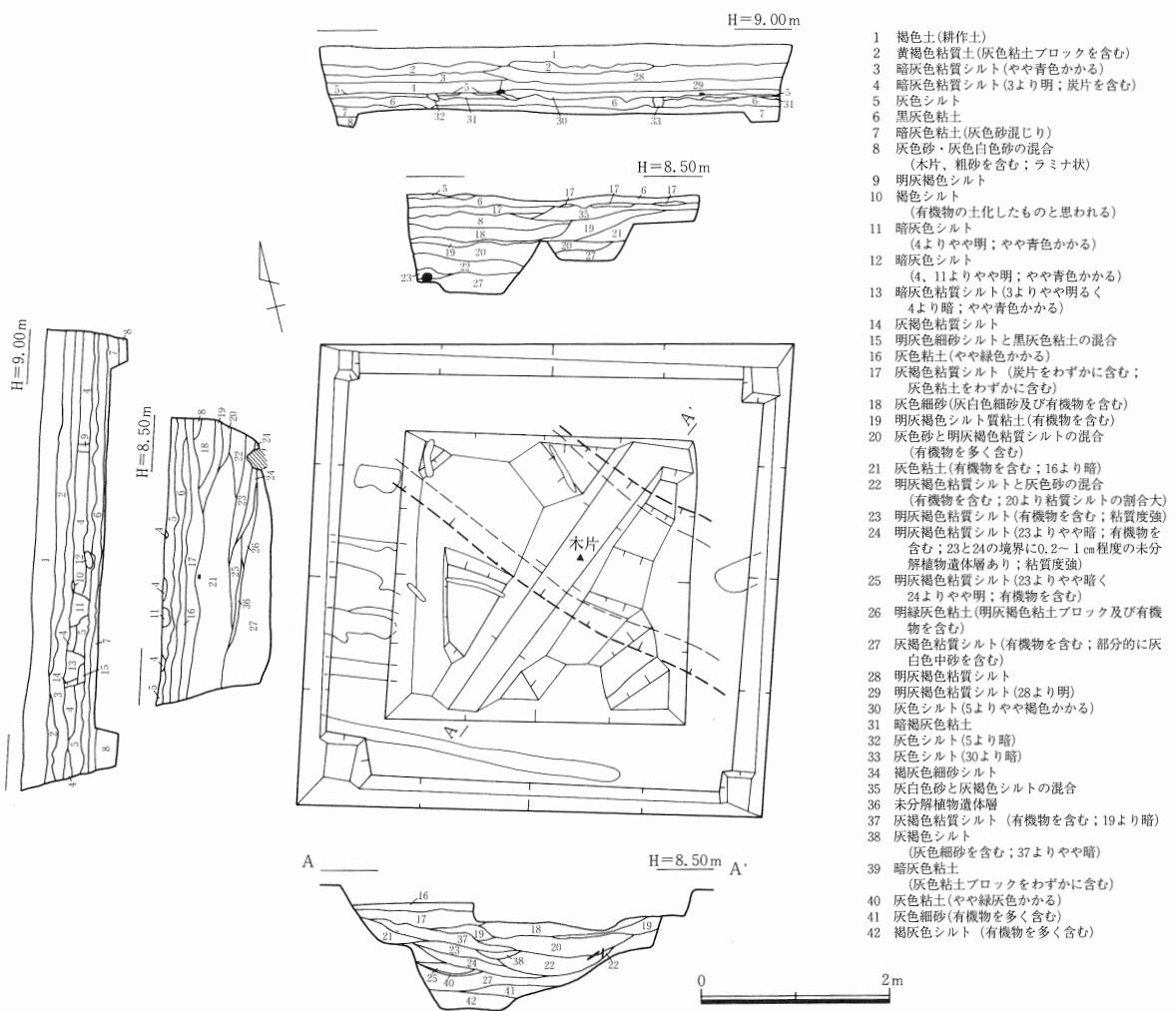
調査対象地は集落の立地する丘陵裾部の微高地から20～40m程東に離れた平野部にあたる。周辺は昭和50年代初めに行われた圃場整備によって区画された水田が広がり、それ以前の野坂集落から続く複数の川筋は現在では農道沿いにU字側溝が埋設され大きな流路は丘陵沿いに一本化されている。水田として利用されていた調査対象地に一部3階建ての福祉施設建物が建設された場合、その影響が大きく及ぶとみられる箇所と丘陵部に近い部分にトレンチ計3本を設定した。

**第3トレンチ（Tr-3）** 平野部の最東に設定した5×5mのトレンチである。調査前の標高は9.02mを測る。調査の結果、標高8.61mで圃場整備以前の「ドウケ（肥溜）」、同様に畦道に関連したとみられる杭列（主軸N-30°-W）を検出した。遺物は客土中から須恵器、土師器、陶磁器片、標高8.33m以下の第32・33層からかなり磨滅した弥生土器片等がナイロン袋（23×34m<sup>2</sup>）1袋分程度出土した。

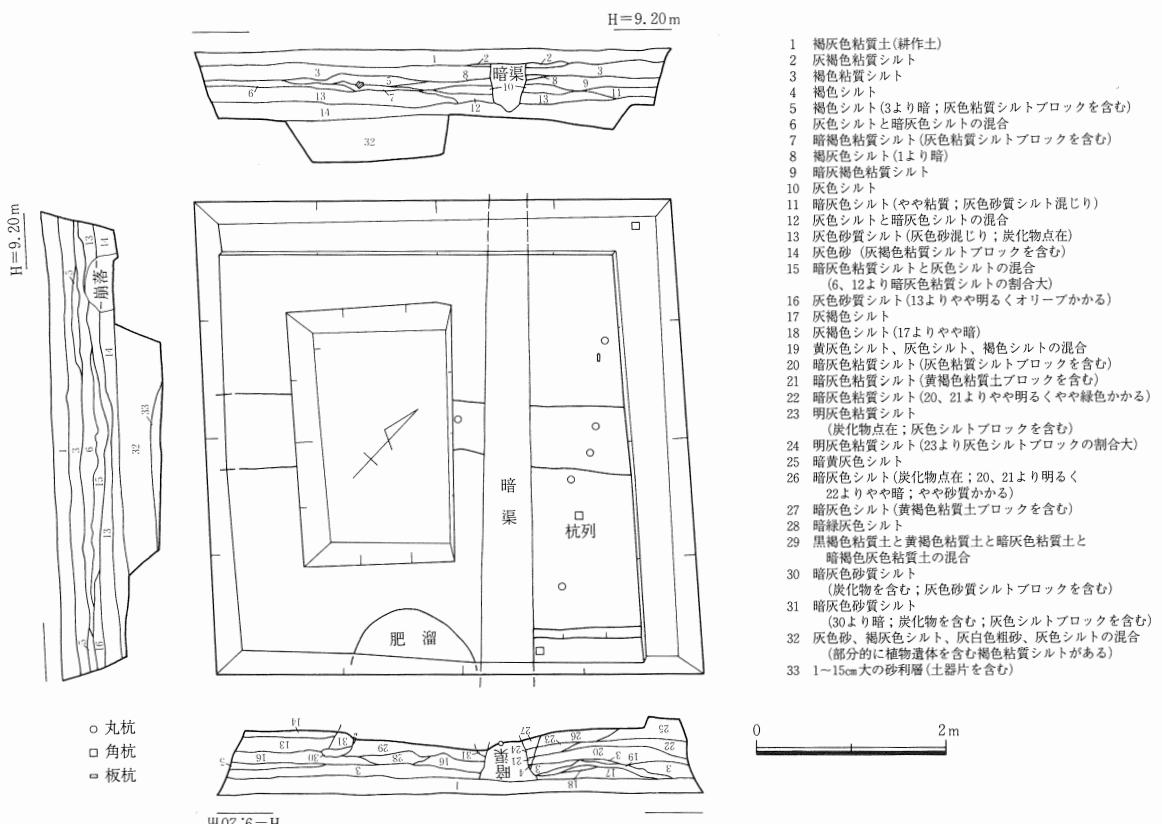
**第4トレンチ（Tr-4）** 最南部に設定した5×5mのトレンチである。調査前の標高は9.12mを測る。調査の結果、耕作土下から新旧2種類の暗渠の他、遺構は検出されなかった。遺物は客土中からわずかに陶磁器片、第3層からも陶磁器片数点が出土している。第5層（標高8.32m以下）は第3トレンチの第33層と類似した砂利層である。なお標高8.33m以下については多量の湧水のため掘り下げを断念した。



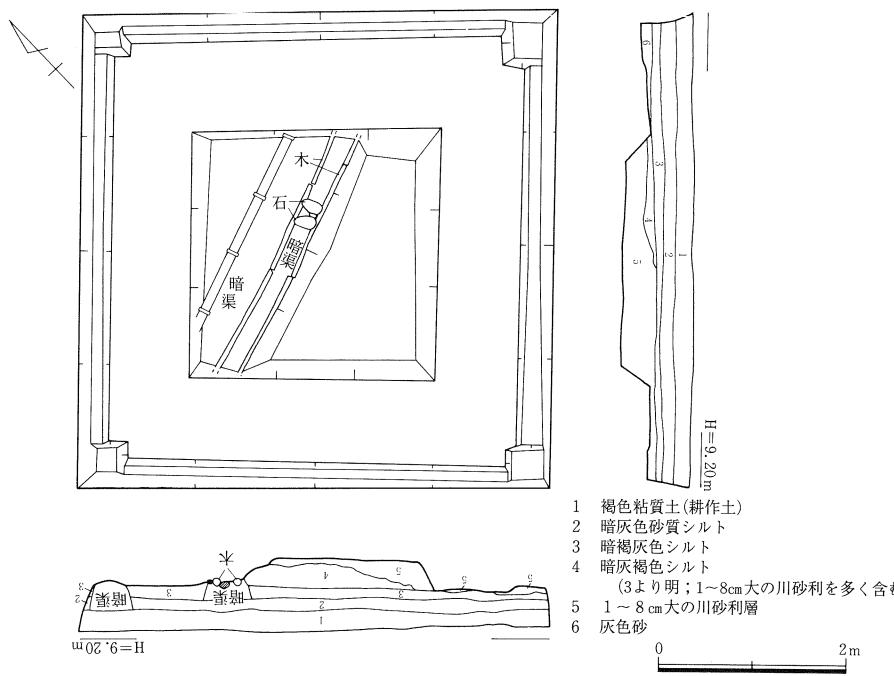
第3図 大柄遺跡第1トレンチ実測図



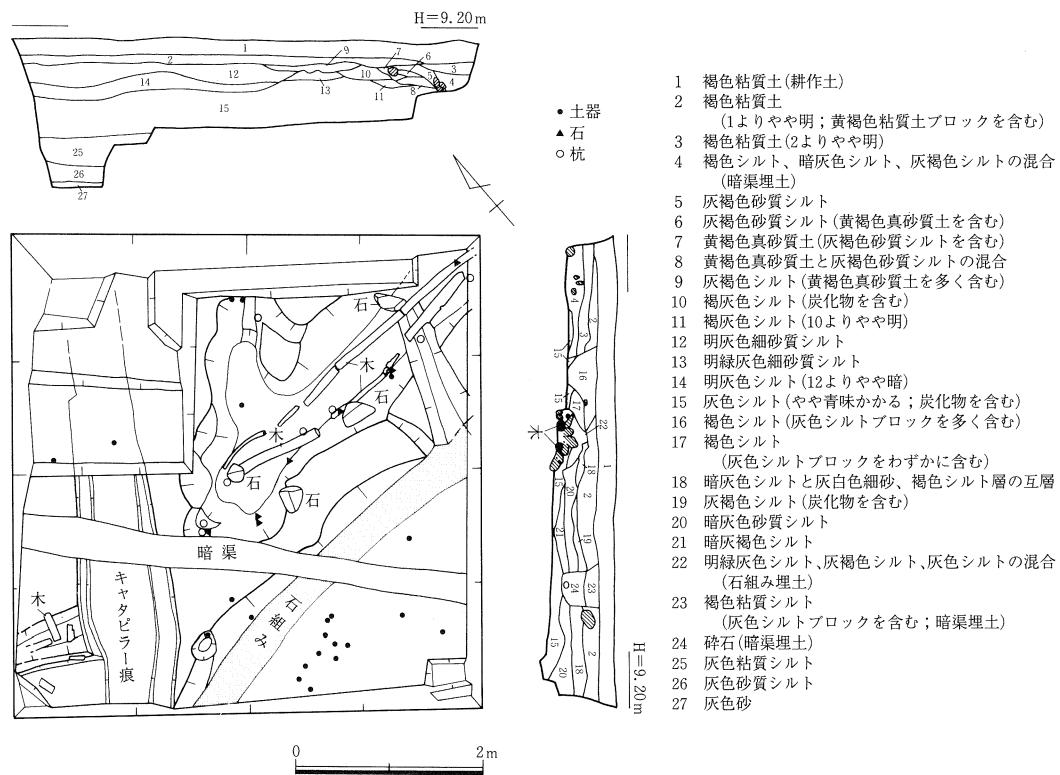
第4図 大柄遺跡第2トレンチ実測図



第5図 大柄遺跡第3トレンチ実測図

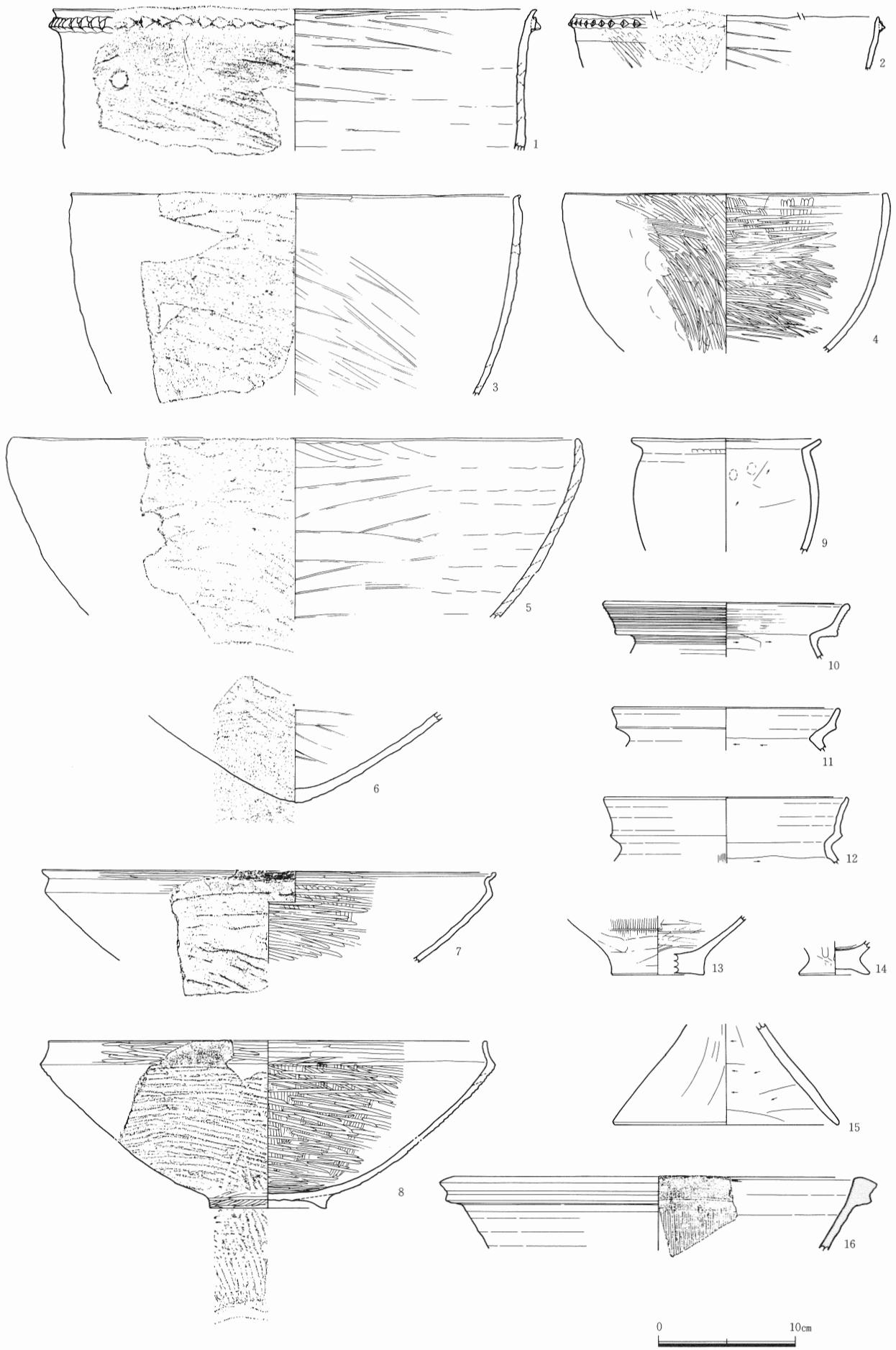


第6図 大柄遺跡第4トレンチ実測図



第7図 大柄遺跡第5トレンチ実測図

**第5トレンチ (Tr-5)** 丘陵近くに設定した $5 \times 5$ mのトレンチである。調査前の標高は9.09mを測る。調査の結果、新旧2種類の暗渠の他、圃場整備の際の重機のキャタピラー痕、圃場整備以前の石段をもった苗床（地元の方の教示）とみられる石組みを検出した。遺物は客土や圃場整備の際の搅乱土から土師器、陶磁器片等の他、第15層（標高8.02~8.67m）灰色シルトから弥生土器、土師器片が出土しているが二次堆積によるものと思われる。なお標高7.48m以下については湧水のため掘り下げを断念した。



第8図 大柄遺跡出土遺物実測図 1~8 Tr-1出土 9・10・15 Tr-3出土  
11~14・16 Tr-5出土

### III 中ノ茶屋遺跡

#### 1. 遺跡の位置と環境

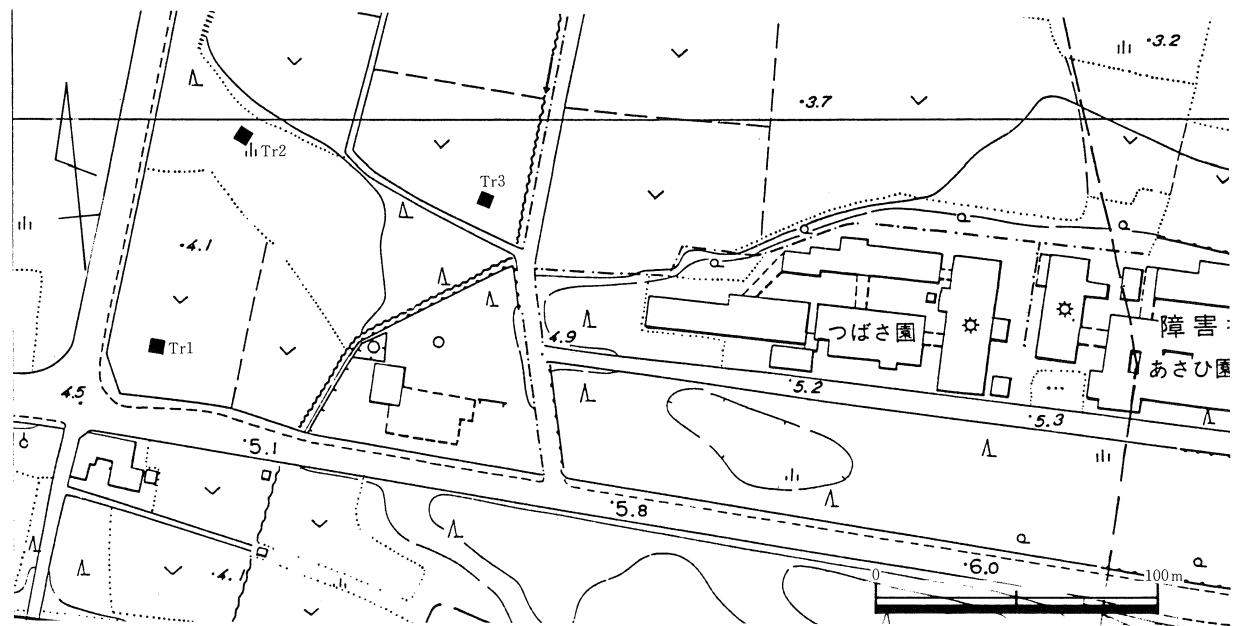
中ノ茶屋遺跡は鳥取市伏野地内に所在し、JR鳥取駅の北西約8km、国道9号線とJR山陰線に挟まれた地域に位置する。40m北に日本海、60m南で湖山池（周囲17.5km）へ達し、かつて日本海と入り海であった湖山池とを遮断するに至った砂丘地に立地する。周辺の遺跡は主として湖山池南東岸に集中し、縄文時代の代表的な遺跡である桂見遺跡、布勢第1遺跡をはじめ弥生時代の湖山第1・2遺跡などの集落や桂見墳墓群などの墳丘墓、大小の古墳、中世墓等が分布する。中ノ茶屋遺跡の周辺は湖山池の南東部と比べて遺跡の分布がやや希薄で、70~80m南の湖山池沿岸に中ノ茶屋古墳群および横穴、60m東に堀越遺跡、2~3km東に鳥取空港を隔てて賀露第1・2遺跡、100m西に末恒遺跡、3km西に身干山遺跡が所在する。古墳、横穴を除いてこれらはいずれも砂丘地に立地し、身干山遺跡以外は遺物散布地で内容が不明瞭な遺跡である。砂丘遺跡では古砂丘とみられる赤褐色の粘土層中から石斧、石鎌、弥生土器などが採集されており、中ノ茶屋遺跡では石鎌、弥生土器、銅鏡が採集されている。このように現在の砂丘下に飛砂活動が停滞し砂丘の表面が安定した時期に当時の人々が暮らした生活面が内包されているものと考えられている。また身干山遺跡では現地表から砂下5mより中世の宝篋印塔、短刀、陶磁器、銅錢等が出土している。中世末から近世にかけて激しい飛砂活動がみられ砂丘が発達したことが窺える。

#### 2. 発掘調査の概要

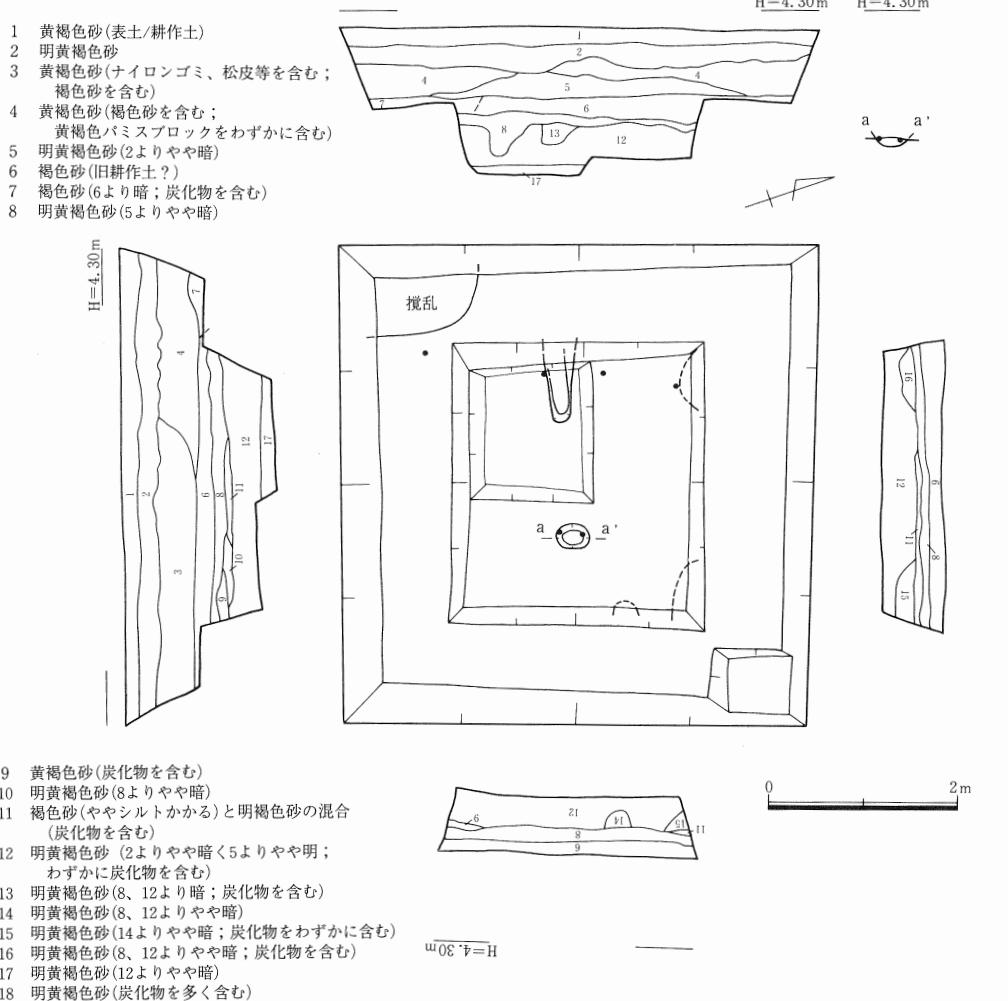
調査対象地は標高3~4m弱の砂地で、近年まで葉煙草の栽培が盛んに行われていた。また防砂が目的とみられる松林が一部北側に広がる。一見して調査対象地南東側の県道寄り、障害者福祉センターが所在する一帯が小高くなってしまっており、そこから北の日本海側へと徐々に標高が下がっていく地形である。調査対象地の三隅に計3本のトレントを設定した。

**第1トレント (Tr-1)** 今回設定した計3本のトレントのうち最南部、県道交差点近くに設定した5×5mのトレントである。調査前の標高は4.12mを測る。調査の結果、第6層（標高3.08~3.39m）は旧耕作土とみられ、その下層の第8層中には瓦やガラス片が含まれる。さらに下層の第12層の上面（標高3.11m）付近でピットや溝状遺構を検出したが、同層中に近現代物とみられる陶磁器片が出土している。なお標高2.49m以下については多量の湧水のため掘り下げを断念した。

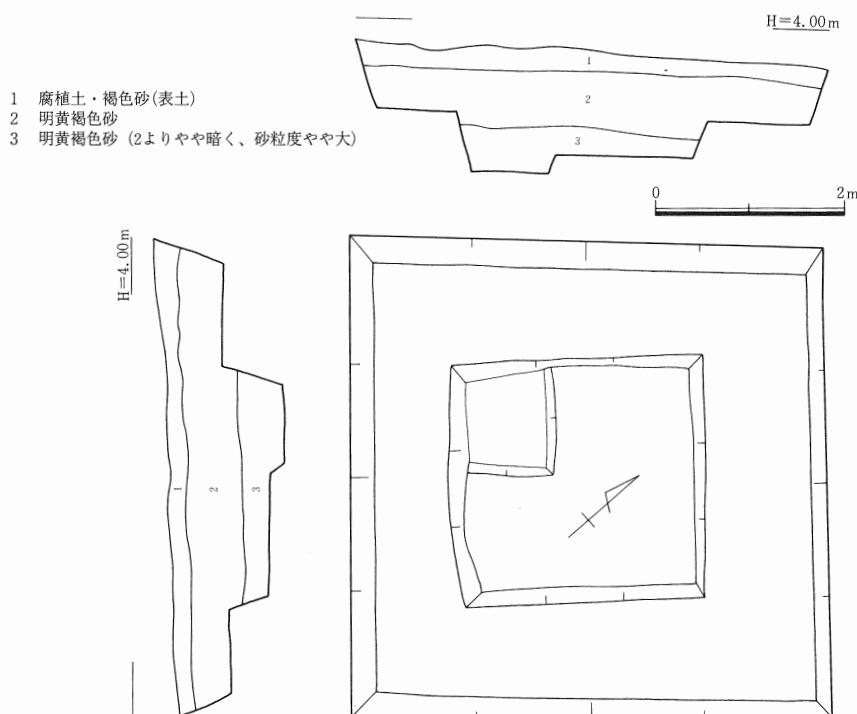
**第2トレント (Tr-2)** 今回設定した計3本のトレントのうち最北部、松林内に設定した5×5mのトレントである。調査前の標高は3.75mを測る。調査の結果、表土を除くと均一な砂層である第2・3層



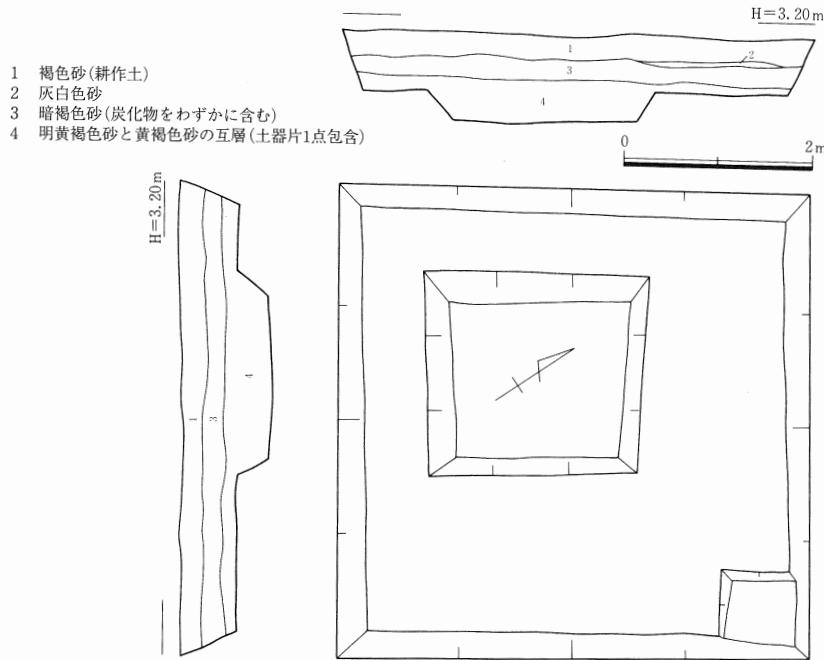
第9図 中ノ茶屋遺跡トレント配置図



第10図 中ノ茶屋遺跡第1トレンチ実測図



第11図 中ノ茶屋遺跡第2トレンチ実測図



第12図 中ノ茶屋遺跡第3トレンチ実測図

が堆積し、出土遺物はみられなかった。なお標高2.41m以下については多量の湧水のため掘り下げを断念した。

**第3トレンチ (Tr-3)** 今回設定した計3本のトレンチのうち最東部に設定した $5 \times 5\text{ m}$ のトレンチである。調査前の標高は3.05mを測る。調査の結果、耕作土を除くと一部灰白色砂がみられるものの炭化物をわずかに含む第3層、明黄褐色と黄褐色の砂の互層である第4層が堆積し、遺構は認められなかつた。耕作土から細長紡錘形の土錐1点、第4層から土器細片1点が出土している。なお標高2.09m以下については多量の湧水のため掘り下げを断念した。

## IV 松原谷田遺跡

### 1. 遺跡の位置と環境

松原谷田遺跡は、鳥取市松原地内に所在し、JR鳥取駅の西約8km弱、湖山池南西岸から500m南に入った吉岡谷の東谷口部、標高5~10mの丘陵裾部に位置する。西側前方に東西を丘陵に挟まれた幅1kmにみたない平野が広がり中央に湖山川が流れる。遺跡から800m南西には温泉街が開け、古くから湯治場として栄えた。周辺の遺跡をみてみると、遺跡から2km北東の湖山池に浮かぶ青島遺跡は明確な遺構は検出されていないものの、縄文時代後期~弥生時代後期の土器、3点の子持勾玉や有孔円板が出土しており、対岸の塞ノ谷遺跡は湧泉に展開した遺跡で、弥生時代中期~古墳時代の土器や分胴形土製品、各種木製模造品等が出土している。ともに水に関連した祭祀的色彩の濃い遺跡として知られている。また500m内陸の高住地内で梨園造成中に扁平鉢式の流水文銅鐸が出土している。これらの遺跡の西側丘陵、湖山池南西岸には、小規模な前方後円墳数基を配する良田、松原古墳群が分布する。松原谷田遺跡は、松原古墳群を有する丘陵の西に張り出す尾根先端の台地および谷合部に立地し、これまで二度の調査が行われている。弥生時代後期~古墳時代の竪穴住居跡や中世の掘立柱建物、土坑、溝状遺構、土器群が検出され、弥生土器や土師器、古式須恵器、土錐等が出土している。また、温泉街西側の標高50~80mの丘陵上には吉岡3号墳(全長34m)をはじめ5基の前方後円墳を含む50余基から成る吉岡古墳群が分布する。このうち葦岡長者古墳(吉岡1号墳)は古くから開口していた横穴式石室で、大正時代と

昭和58、59年に民間の研究団体によって調査が行われている。石室内から箱式石棺と、馬具、釣針、鉄鏃、須恵器、土師器等が検出され、6世紀中葉に築造されたものとみられている。温泉街から300m南の水田部には白鳳期とされる吉岡大海廃寺の推定地があり、鷦尾片や軒丸瓦等が出土している。また、温泉街を挟んで東側の丘陵裾部には複数の遺物散布地が確認されている。

## 2. 発掘調査の概要

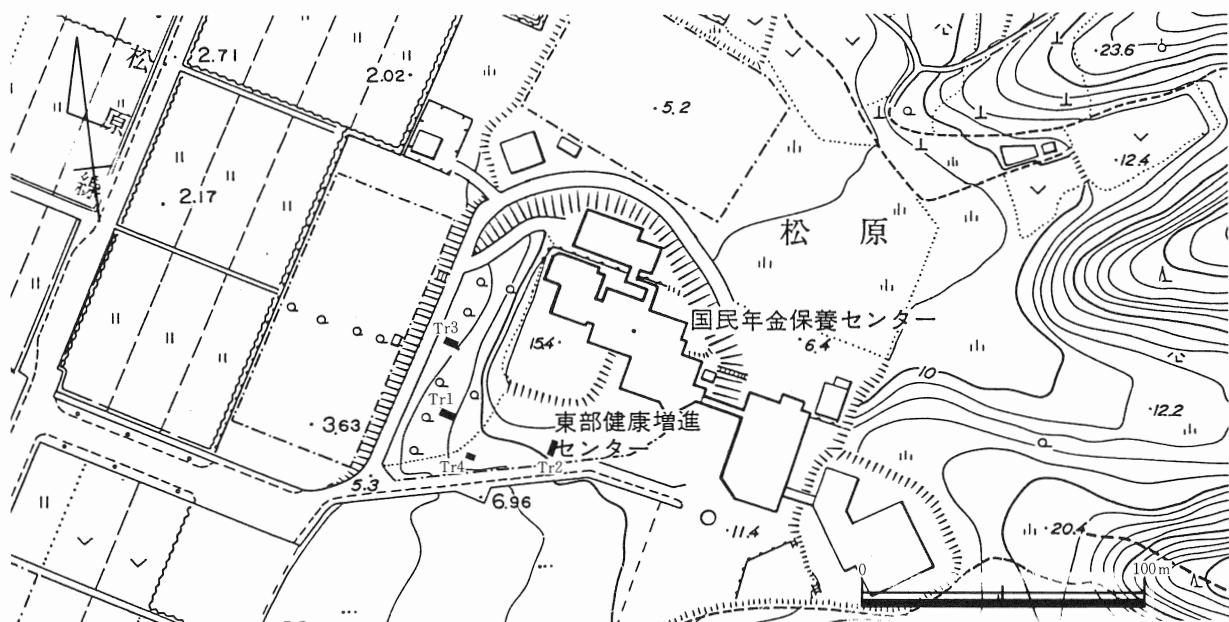
調査対象地は北東に延びる主稜線から複雑に西に張り出す支稜線先端の台地に位置し、県立東部健康増進センターおよび国民年金保養センター建設の際に低地部分には盛土が行われている。それ以前は段状に区画されて畠あるいは水田として利用されていた。建物建設に伴い、1974、1975（昭和49、50）年と二度の発掘調査が実施されているが、遺跡の範囲が未確定のため範囲確認を目的として、工事以前の地形図や発掘調査記録を参考に計4本のトレンチを設定した。

**第1トレンチ（Tr-1）** 現地形で傾斜地から平坦地への変換点に設定した5×2mのトレンチである。調査前の標高は7.34mを測る。調査の結果、表土下に客土（第12-13層）を確認しその下層に落ち込み状の土層変化（第15~18、22~24、29層）が認められた。表土あるいは客土中から須恵器片1点を検出した。土層変化については遺構の可能性は薄いものと思われる。

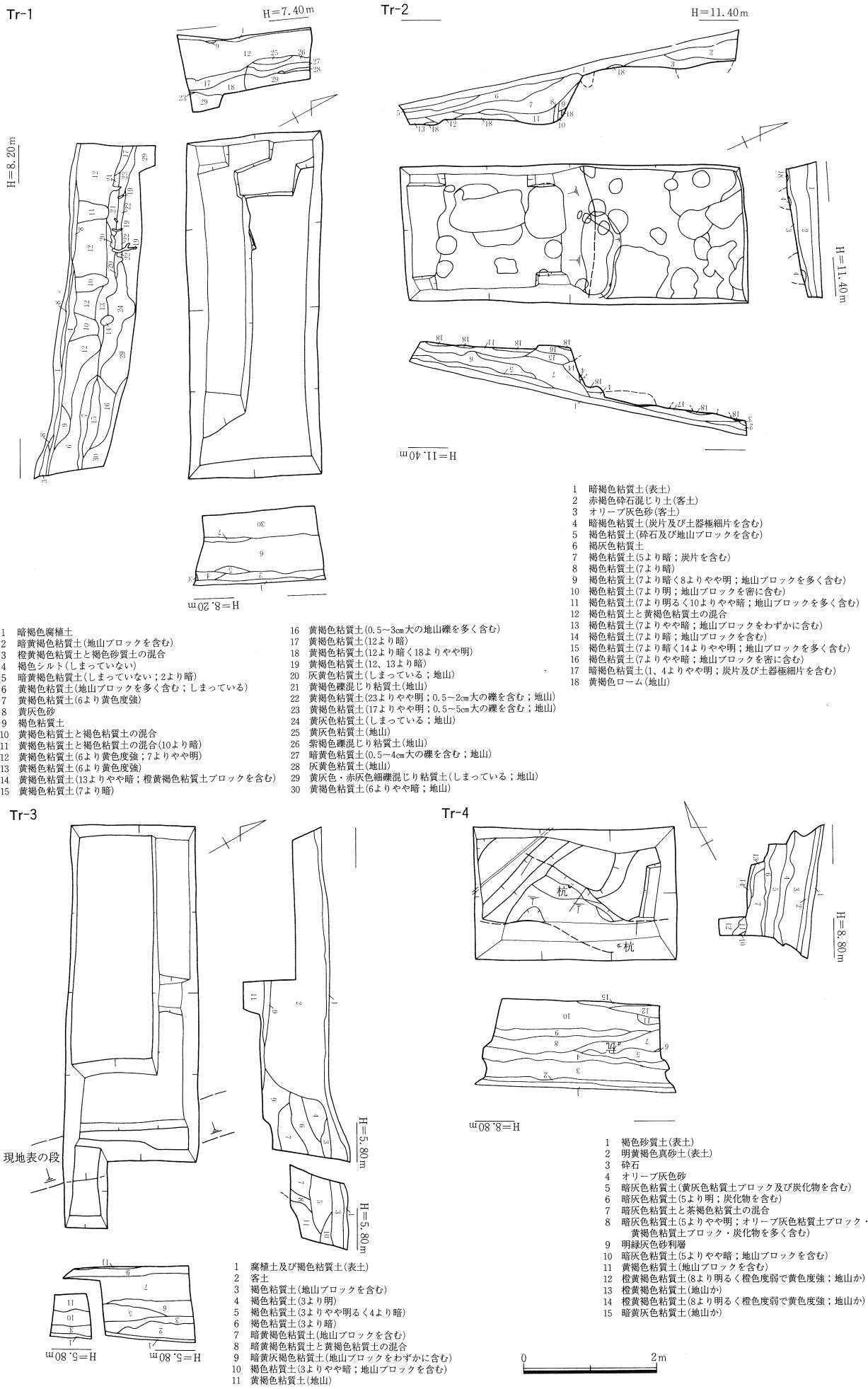
**第2トレンチ（Tr-2）** 現地形では盛土により緩斜面となっているが以前は畠あるいは水田として利用され段状の地形であった。昭和58、59年の調査で検出された溝状遺構の南延長線付近に設定した5×2mのトレンチである。調査前の標高は11.26mを測る。調査の結果、表土、客土（第1~3層）下で旧地形の段を確認し、地山（第18層）上面で切り合う多数の土坑、ピットを検出した。遺物は客土中から陶磁器、土師器、土錘、遺構検出面直上およびその上層から土師器、須恵器細片を検出した。

**第3トレンチ（Tr-3）** 今回調査したトレンチの中で最も標高の低い現地形の平坦地に設定した5×2m+1×0.6mのトレンチである。調査前の標高は5.68mを測る。調査の結果、トレンチの南西端から旧地形とみられる畠あるいは水田として利用した際の段状の土層変化を確認した。遺物は、客土中（第2層）から陶器、段状に盛られた土中（第3~10層）から磁器を検出した。

**第4トレンチ（Tr-4）** 第2トレンチを設定した段より更にもう一段下に遺構が存在するかどうか確認する目的で設定した3×2mのトレンチである。調査前の標高は8.68mを測る。調査の結果、表土下に建物建設時の仮設道路、更に下層にコーナーをもつ旧地形を確認し、盛土による段とそれに伴う立杭2本を検出した。遺物は、客土中から陶器片が出土している。



第13図 松原谷田遺跡トレンチ配置図



第14図 松原谷田遺跡第1、第2、第3、第4トレーンチ実測図

## V 円護寺遺跡群

### 1. 遺跡の位置と環境

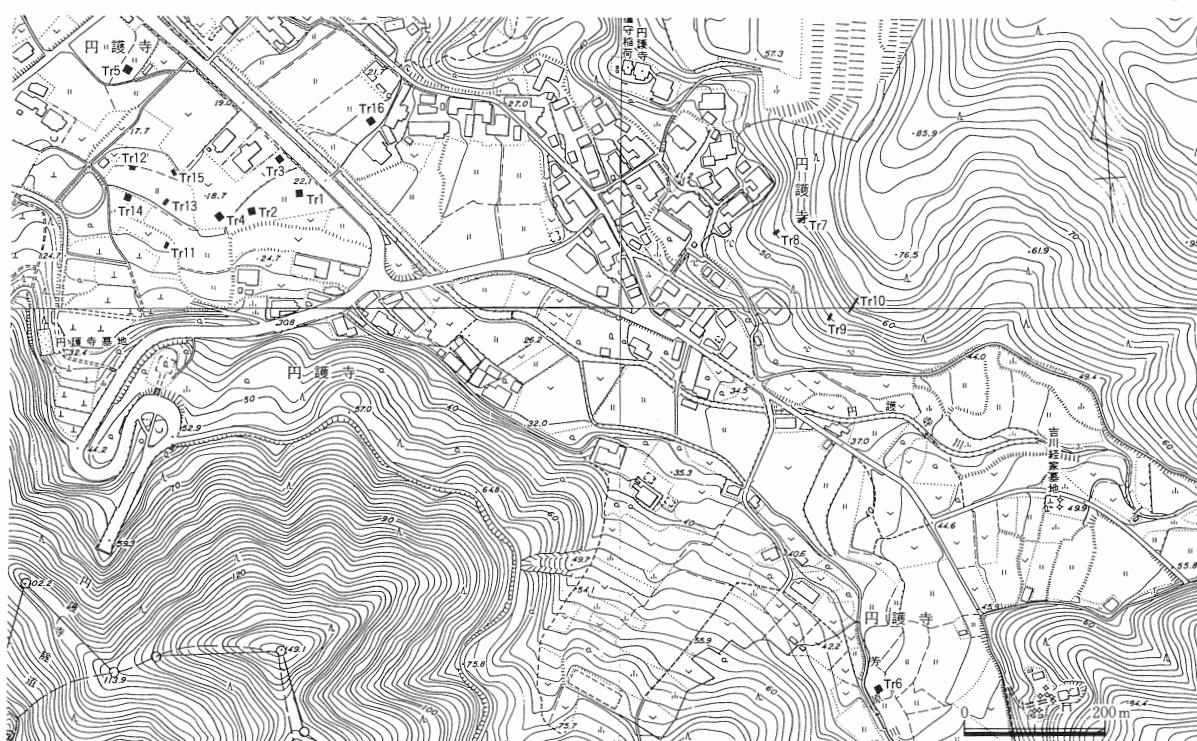
円護寺遺跡群は、鳥取市円護寺地内に所在し、円護寺古墳群と円護寺遺跡から成る遺跡群である。JR鳥取駅から北東へ約2.8km、久松山北側の谷合と周辺の丘陵を中心として展開する。平野の中央を旧袋川の支流である円護寺川が流れ、谷の東入口は砂丘地で浜坂横穴や浜坂遺跡等が所在する。途中円護寺川は覚寺川とに分岐し谷を分ける。覚寺集落奥の畑地斜面には白鳳時代の瓦が出土する瓦窯跡の推定地がある。谷沿いにはさらに開地谷古墳群、覚寺遺跡、覚寺古墳群、雁金山古墳群、雁金山横穴等が分布する。また城山の裏側にあたるため丘陵上に砦や城跡が残る。江戸時代、付近は円護寺石あるいは覚寺石と呼ばれる加工の容易な凝灰岩の産地として知られた。昭和57年に宅地造成に伴って横穴式石室をもつ円護寺27号墳（径15m円墳、6世紀初頭）が、平成元年に国道9号線バイパス建設に伴って覚寺7～13号墳が調査されている。

### 2. 発掘調査の概要

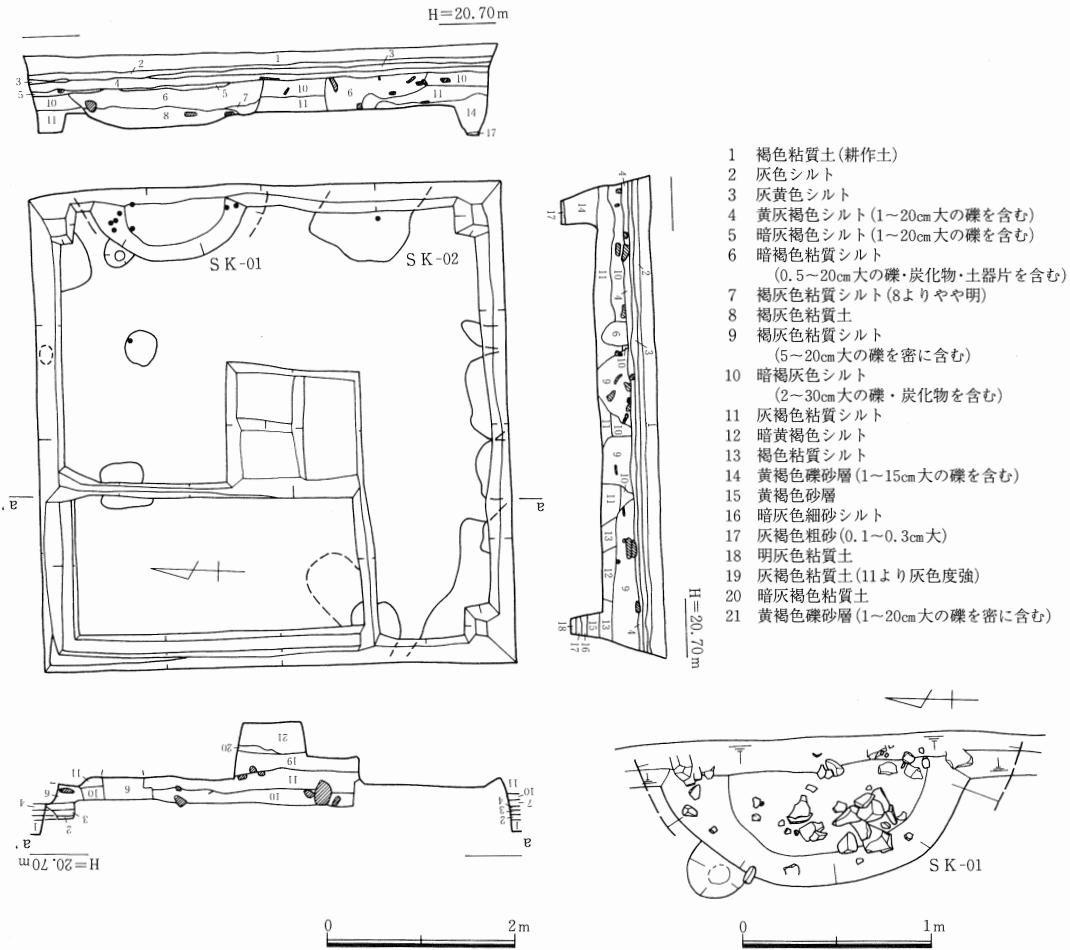
調査対象地は、これまで第1～5、11～15トレーニング付近は遺物散布地として、第6～10トレーニングは古墳が存在する可能性があるとされてきた地域である。調査は、谷部では遺構存在の有無とその時期および性格とともに遺跡の範囲等の確認を目的として、丘陵地では周溝等の遺構存在の確認に主眼を置き、計16本のトレーニングを設定した。なお、第7～10トレーニング実測図に記したレベルラインは任意杭A、Bを基準としている。

**第1トレーニング (Tr-1)** 久松山から北へ伸びる丘陵の延長上、現在水田として利用されている微高地に設定した5×5mのトレーニングである。調査前の標高は20.50mを測る。調査の結果、第10層上面が遺構検出面で土坑やピットを検出した。このうちSK-01を掘り下げ、輪状のつまみを有する杯蓋をはじめ須恵器、土師器が、SK-02埋土から古墳時代の赤彩高杯片を検出した。耕作土下の第2～4層は遺物包含層で、土師器、須恵器片が検出され、第4・5層は1～20cm大の礫を密に含むシルト層で土石流による堆積と考えられる。

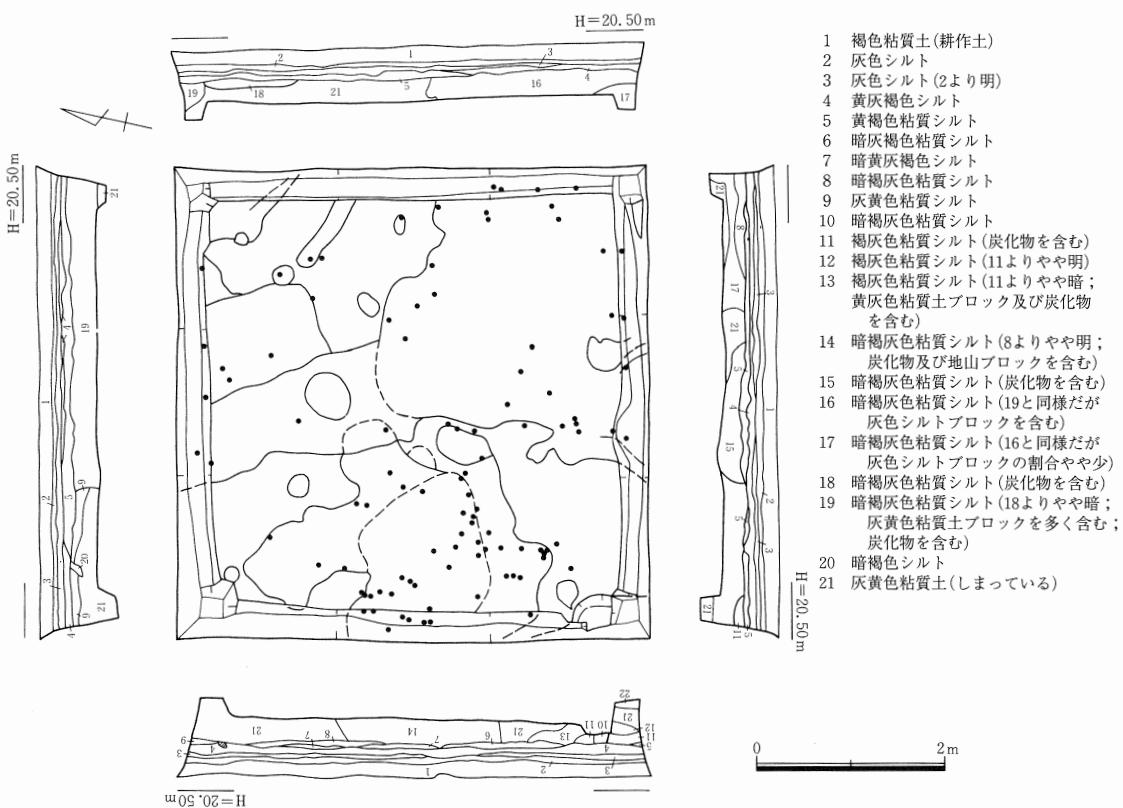
**第2トレーニング (Tr-2)** 第1トレーニングの西30mに設定した5×5mのトレーニングである。調査前の標高は20.38mを測る。調査の結果、上層は第1トレーニングと同様な堆積で第21層上面が遺構検出面である。切



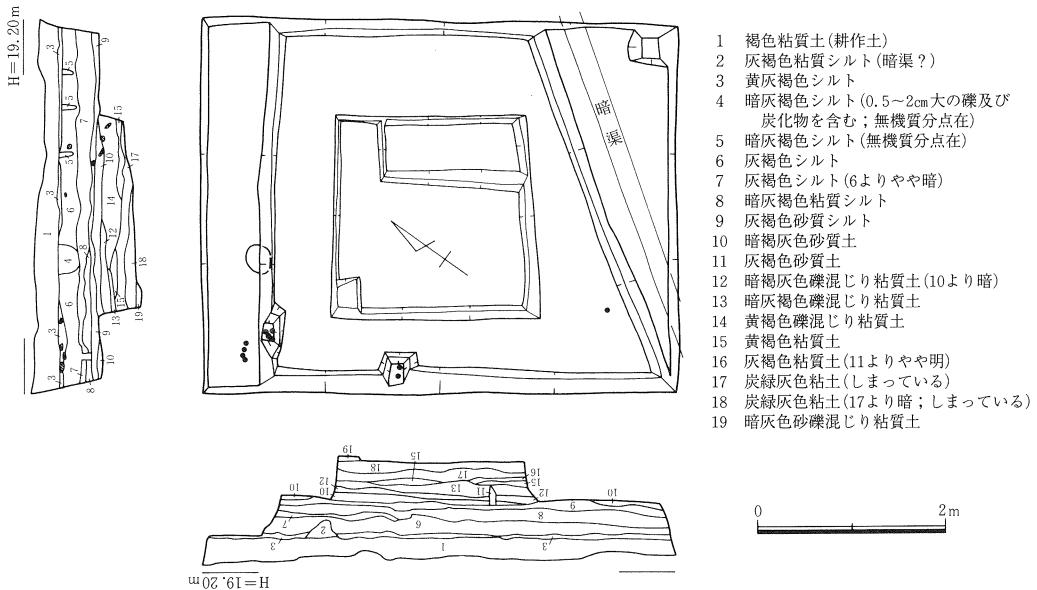
第15図 円護寺遺跡群トレーニング配置図



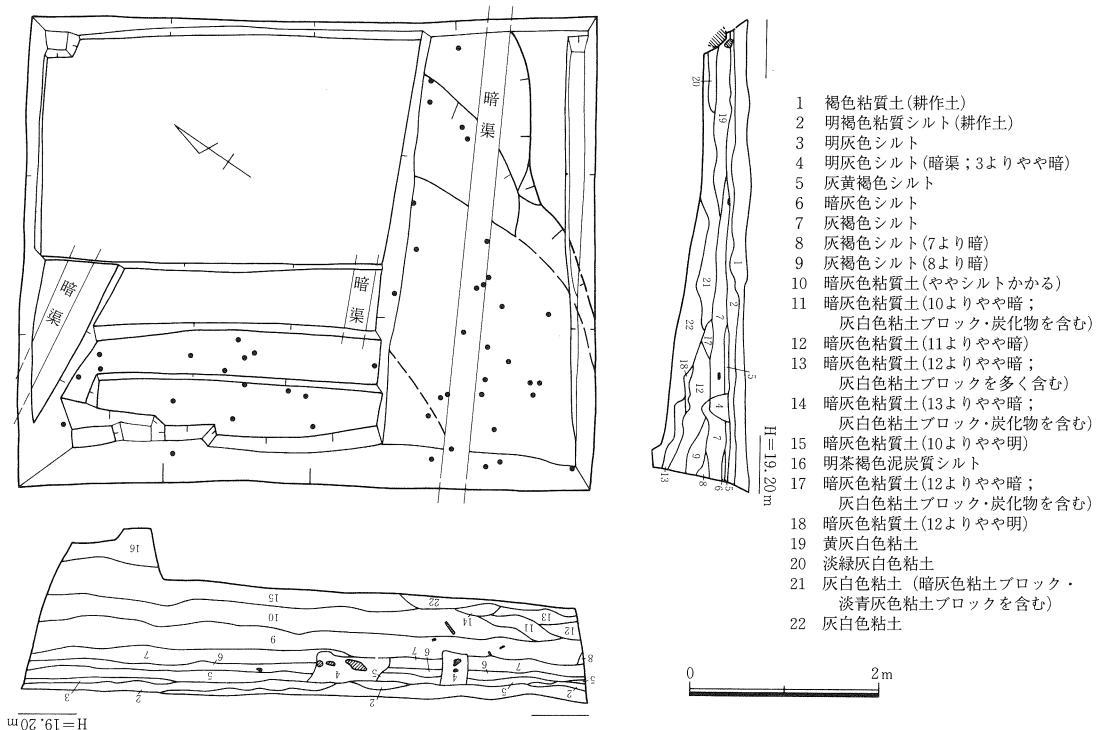
第16図 円護寺遺跡群第1トレングチ実測図



第17図 円護寺遺跡群第2トレングチ実測図



第18図 円護寺遺跡群第3トレングチ実測図

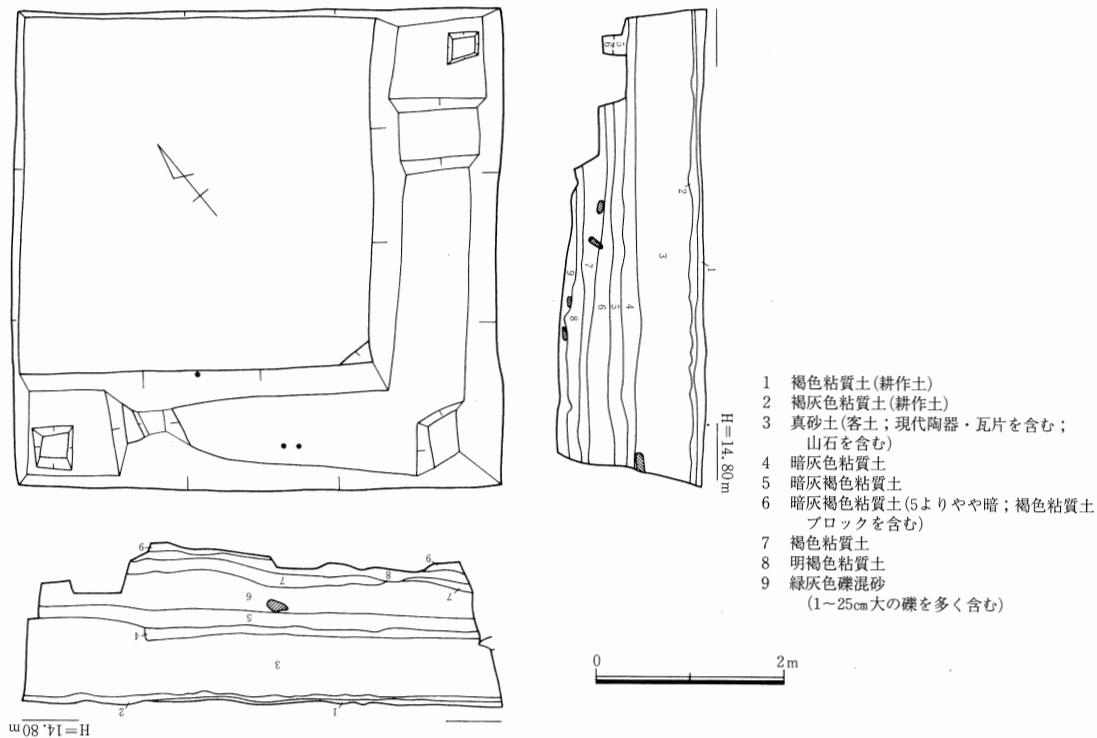


第19図 円護寺遺跡群第4トレングチ実測図

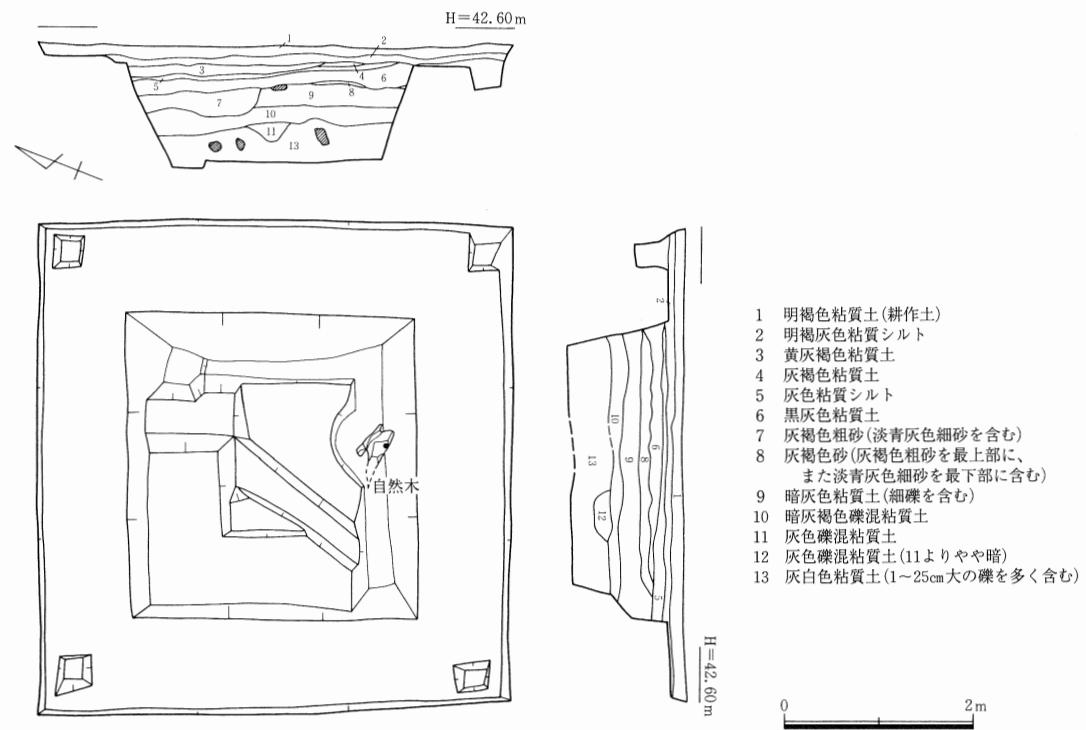
り合いが複雑で各遺構の形状は不明瞭である。遺構検出面までの耕作土下各層で遺物を検出しており、土師器、須恵器、瓦質土器の他、弥生土器片も若干出土している。

**第3トレングチ (Tr-3)** 第1トレングチの北約20mの一段低くなった畠地に設定した5×3.9mのトレングチである。調査前の標高は19.13mを測る。調査の結果、上部は削平を受けているものとみられ、第6層上面が遺構検出面である。土層断面からピットを検出した。耕作土および遺物包含層である第3層からそれぞれ土師器、須恵器片を検出した。

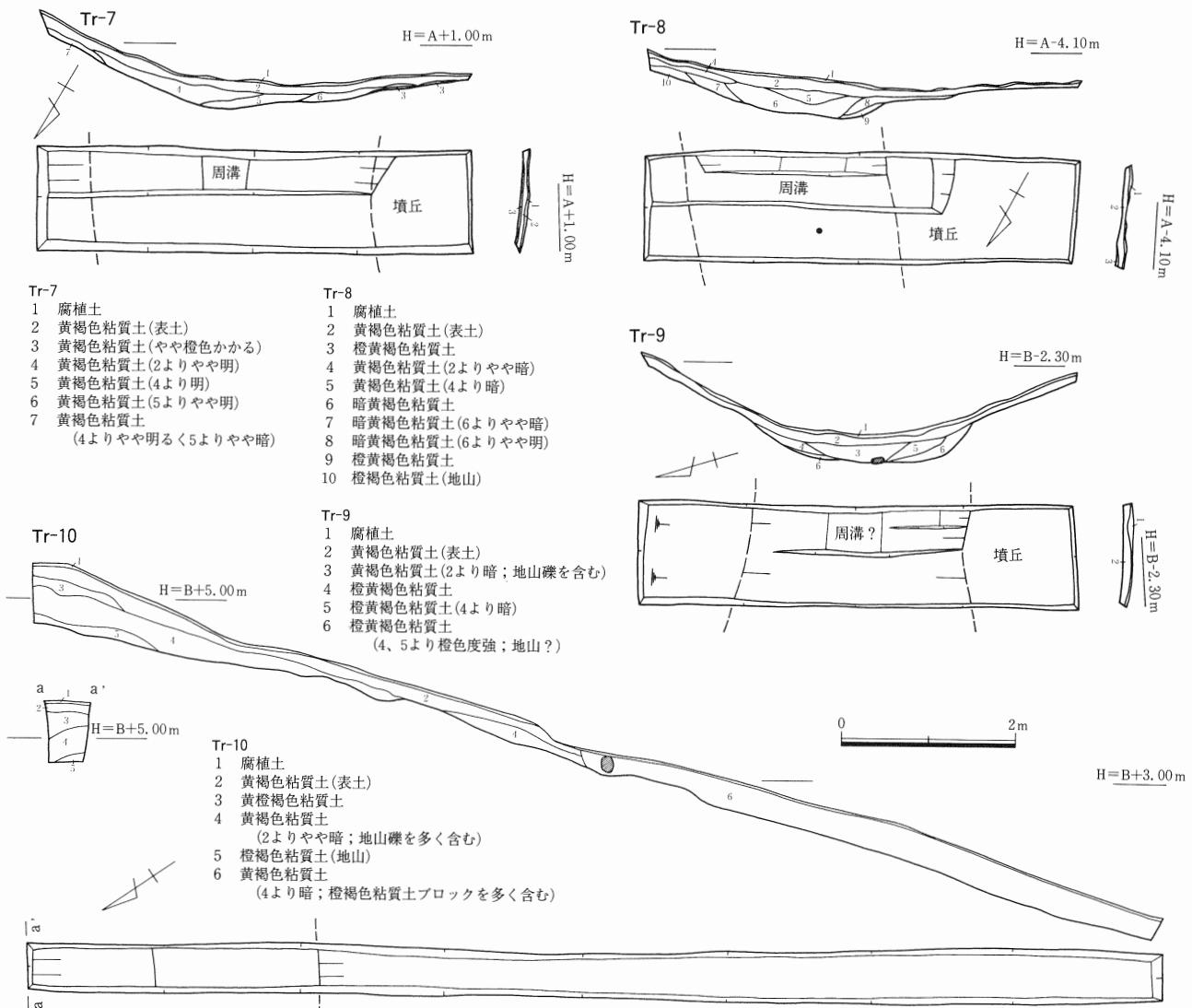
**第4トレングチ (Tr-4)** 第2トレングチの西約20mの狭い谷の縁部に設定した5×6mのトレングチである。調査前の標高は19.09mを測る。調査の結果、耕作土下の第3・5～7、第8～15層が遺物包含層で、前



第20図 円護寺遺跡群第5トレンチ実測図



第21図 円護寺遺跡群第6トレンチ実測図



第22図 円護寺遺跡群第7、第8、第9、第10トレント実測図

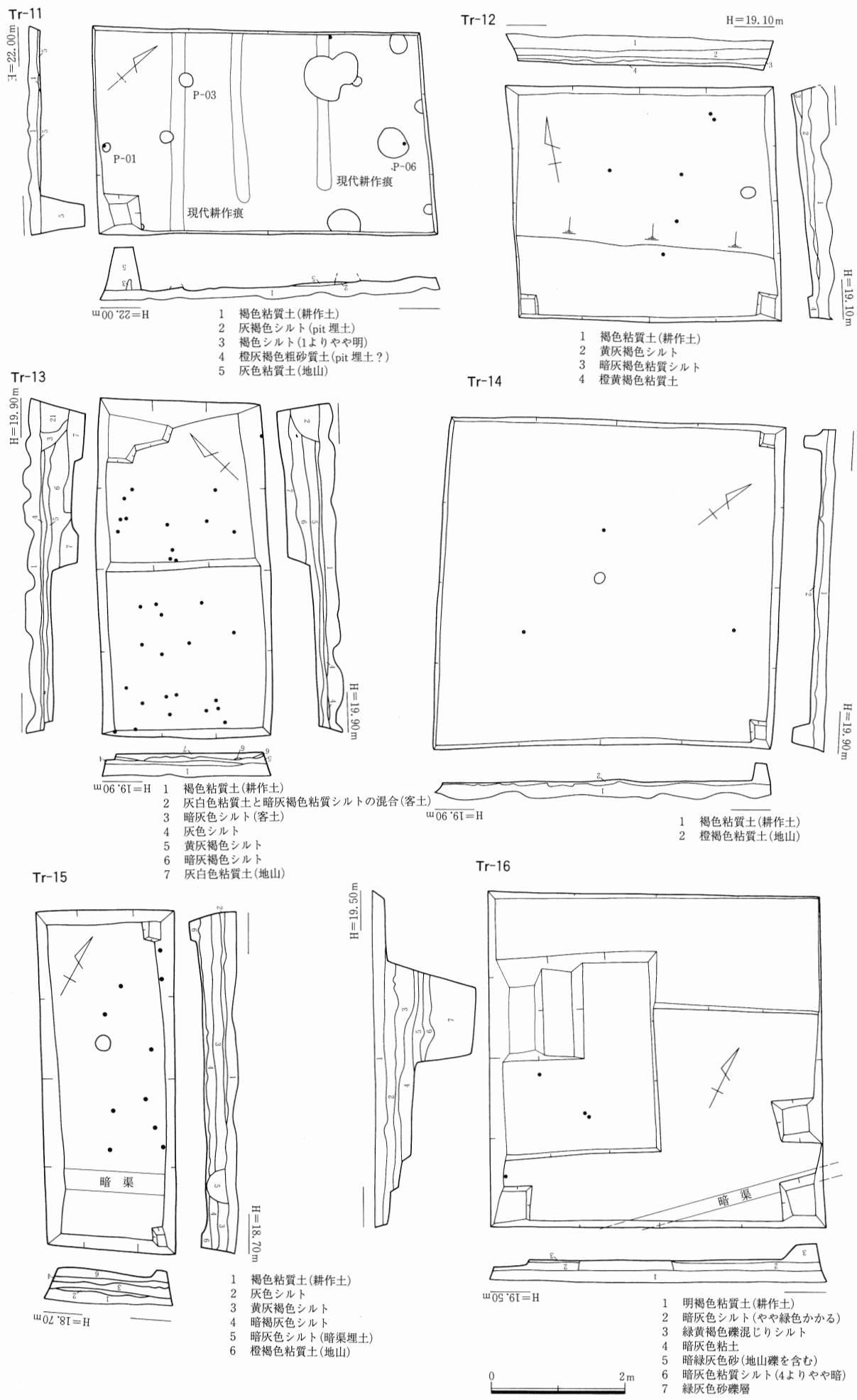
者から土師器、須恵器、後者から土師器、須恵器、瓦質鍋、鉱滓、板状・角材状木製品を検出した。後者は谷部の旧流路堆積層とみられ、わずかに弥生土器片が含まれる。

**第5トレント (Tr-5)** 今回設定した計16本のトレントの内、最北の水田部に設定した $5.1 \times 5$ mのトレントである。調査前の標高は14.67mを測る。調査の結果、明瞭な遺構と認められるものは検出されなかった。耕作土下に現代陶器や瓦片を含む客土（第3層）、その下は谷筋の堆積層とみられ、このうち第9層には1~25cm大の緑色かかる円護寺石を密に含み、わずかに土師器、須恵器細片を検出した。

**第6トレント (Tr-6)** 今回設定した計16本のトレントの内、最南で谷奥の水田部に設定した $5 \times 5$ mのトレントである。調査前の標高は42.47mを測る。調査の結果、明瞭な遺構とみられるものは検出されなかった。第9層から須恵器細片1点、第13層から流木とみられる自然木が出土した。

**第7トレント (Tr-7)** 円護寺集落背後の丘陵斜面の標高63m、傾斜の変換点に設定した $5 \times 1.2$ mのトレントである。調査の結果、地山をカットしたとみられる土層の変化が認められ、隆起状の現地形を考え合わせると古墳の可能性が考えられる。遺物は検出されなかった。

**第8トレント (Tr-8)** 第7トレントの南西側の尾根の先端側、標高56m前後に設定した $5 \times 1.2$ mのトレントである。調査の結果、畑作によるとみられる削平を受けているが、古墳の周溝と考えられる土層変化を確認した。表土と周溝埋土とみられる土層の境界付近で土器片1点が出土している。



第23図 円護寺遺跡群第11、第12、第13、第14、第15、第16トレンチ実測図

**第9トレンチ (Tr-9)** 第7・8トレンチの南東隣の尾根斜面、標高54m前後に設定した5×1.2mのトレンチである。調査の結果、地山をカットしたものとみられ、隆起状に認められる現地形を考慮すると古墳の可能性が考えられる。遺物は検出されなかった。

**第10トレンチ (Tr-10)** 第9トレンチの尾根上部、標高58~65m付近に設定した13×0.5mのトレンチである。調査の結果、遺構とみられるような土層変化は認められなかった。遺物も検出されなかった。

**第11トレンチ (Tr-11)** 第1~4トレンチの西側、丘陵延長上の微高地に設定した5×3mのトレンチである。調査前の標高は21.91mを測る。調査の結果、上部は畑作の際の削平を受けているものとみられ、耕作土直下の地山面で複数のピットを検出した。P-01、06から土器細片、P-03から炭片と鉱滓が出土している。

**第12トレンチ (Tr-12)** 第11~15トレンチが位置する丘陵延長上の微高地先端部、現況では段々畑として利用されている標高19.00mに設定した4×3.5mのトレンチである。調査の結果、上部は削平を受けているものとみられ、地山面で北へ下る傾斜が認められ、径22cmのピット1基を検出した。耕作土から土師器、陶磁器片が、第2・3層から土師器、須恵器が出土している。

**第13トレンチ (Tr-13)** 第11トレンチの北25mに設定した5×2.5mのトレンチである。調査前の標高は19.83mを測る。調査の結果、明瞭な遺構と認められるものは検出されなかつたが、トレンチの北東部は埋め立てて平地としたことが土層断面等から明らかとなった。耕作土から須恵器、陶磁器片が、第4~6層から土師器、須恵器、瓦質土器等が出土している。

**第14トレンチ (Tr-14)** 第13トレンチの西20mに設定した5×4.9mのトレンチである。調査前の標高は19.76mを測る。調査の結果、上部は削平を受けているものとみられ、耕作土直下は地山面で、トレンチ中央から径18cmのピット1基を検出した。耕作土から土師器、須恵器、陶器片が出土している。

**第15トレンチ (Tr-15)** 第13トレンチの北15mに設定した5×2mのトレンチである。調査前の標高は18.55mを測る。調査の結果、暗渠の他に地山面でトレンチ中央から径23cmのピット1基を検出した。第2~4層から土師器、須恵器細片が出土している。

**第16トレンチ (Tr-16)** 円護寺川右岸の平野中央やや東寄りに設定した5×4.9mのトレンチである。調査前の標高は19.35mを測る。調査の結果、谷筋の土石流の堆積状況を示し、遺構と認められるものは検出しなかつた。耕作土から須恵器、陶磁器片が、第2・3層で土師器、近現代の磁器や瓦片が出土している。

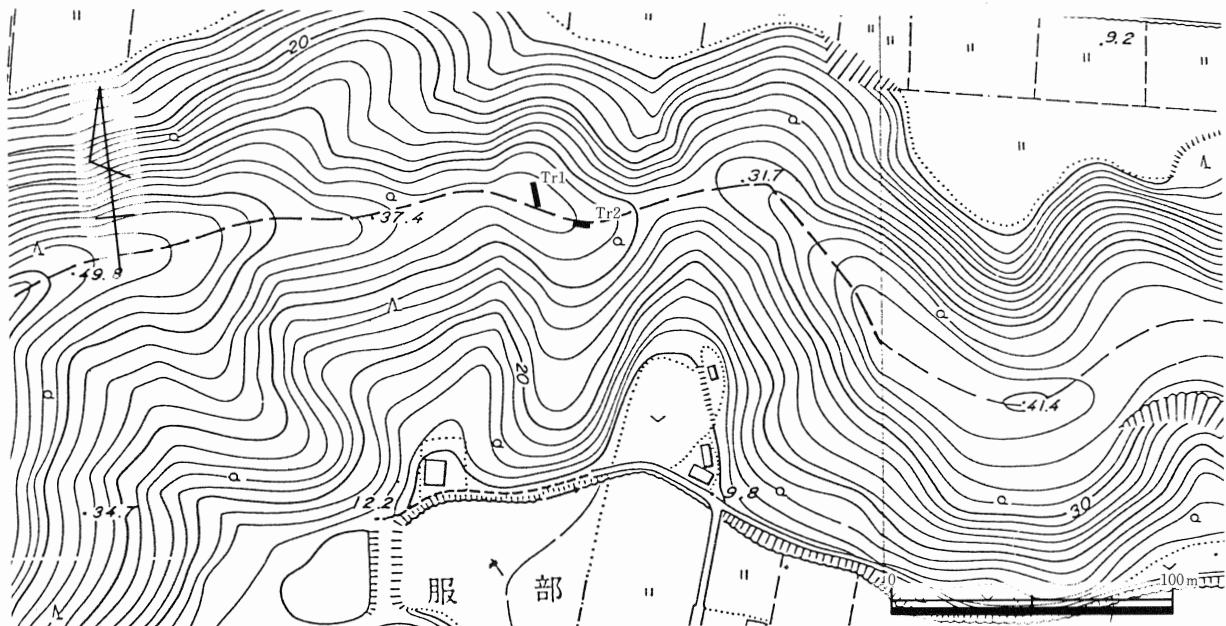
## VI 服部古墳群

### 1. 遺跡の位置と環境

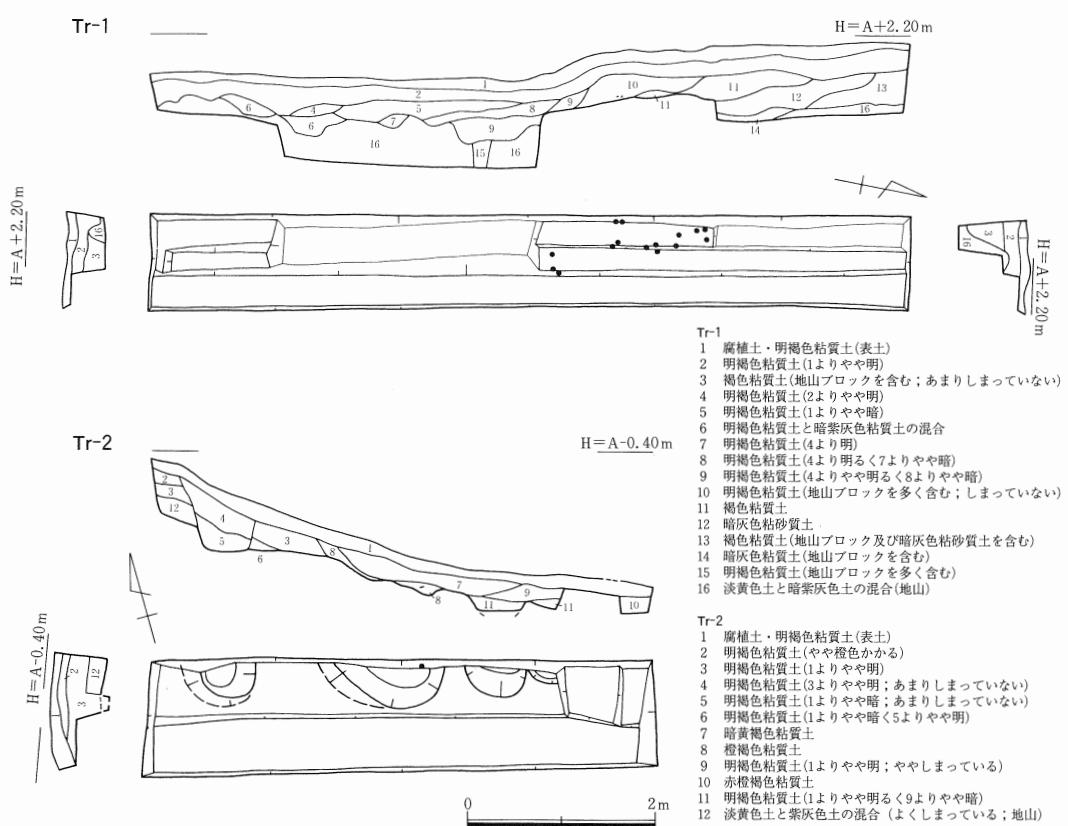
服部古墳群は鳥取市服部地内に所在し、JR鳥取駅の南西約3km、東に千代川を望む標高30~80mの独立丘陵に立地する。丘陵の最高所に前方後円墳である服部18号墳（全長32.5m）が位置し、南側の谷裾部に集中する箇所がみられるが、主として東へ下る尾根上に円墳20数基が分布する。平野部は千代川の氾濫原にあたり、服部集落西側の標高7~8mの微高地に位置する服部遺跡では圃場整備によって弥生時代後期の土器や大足・田下駄等の木製品が出土している。周辺の遺跡として北東に釣山古墳群、南西に下味野古墳群があり、それぞれ20~35mの小規模な前方後円墳を含むが下味野23号墳（73.5m）は周辺ではやや大きい規模である。釣山北の平野部には山ヶ鼻、菖蒲遺跡が位置し、縄文時代後期~中世の遺構や遺物が検出されている。またその東には白鳳期創建と推察されている菖蒲廃寺がある。

### 2. 発掘調査の概要

調査対象地は東西に延びる尾根稜線部、標高33~35mに位置し、踏査等から古墳が存在するとされてきた地域である。このため調査は周溝等の遺構の確認に主眼をおいて現地形の変換点などを目安に計2本のトレンチを設定した。なお、各トレンチ実測図に記したレベルラインは任意杭Aを基準としている。



第24図 服部古墳群トレンチ配置図



第25図 服部古墳群第1、第2トレンチ実測図

**第1トレンチ (Tr-1)** 現況では椎茸栽培によって平坦に削平されているが、周辺地形を考慮して微妙な傾斜の変換点に設定した8.1×1 mのトレンチである。調査の結果、第2層下で南側へ落ち込む土層の変化を確認し、そのうち第10・11層から須恵器甕体部片がまとまって検出された。古墳あるいは何らかの遺構が存在する可能性が大きい。

**第2トレンチ (Tr-2)** 稜線上の推定2基の古墳間に設定した5.4×1.1 mのトレンチである。調査の結果、木ノ根による搅乱のほか周溝埋土の可能性がある土層(第7・8層)を検出した。遺物は第8層から土師器体部片1点が出土した。トレンチの東西に古墳が存在する可能性が大きい。

## VII 桂見遺跡群

### 1. 遺跡の位置と環境

桂見遺跡群は、鳥取市桂見地内に所在し、桂見遺跡、東桂見遺跡、西桂見遺跡、倉見古墳群、桂見墳墓群から構成される遺跡群の総称である。JR鳥取駅から西へ4.5km、湖山池の南東岸部に位置する。風化した花崗岩を基盤とする入り組んだ丘陵上には主として墳墓が営まれ、その丘陵に挟まれた谷底平野を中心として桂見遺跡、東桂見遺跡が展開する。これまでに各種開発事業に伴って十数度の発掘調査が行われている。また、東桂見遺跡の東には布勢鶴指奥墳墓群、布勢第1・2遺跡、里仁古墳群が、西桂見遺跡の西には高住、良田、松原古墳群、青島遺跡、塞ノ谷遺跡、高住銅鐸出土地等が、湖山池の東岸には帆城遺跡、天神山遺跡、湖山第1・2遺跡等が分布し、湖山池の南東部は遺跡の密集地帯となる。これまでの調査で、桂見遺跡群では縄文時代前期末を初源として後晩期に盛期を迎え、その後弥生時代後期になって西桂見等の墳丘墓が示すように著しい地域勢力の台頭があり一部古墳時代へと続く。律令体制下、東大寺高庭庄として開発が進められ、中世には布施天神山城を背景として丘陵上に多数の中世墓が造営されている。

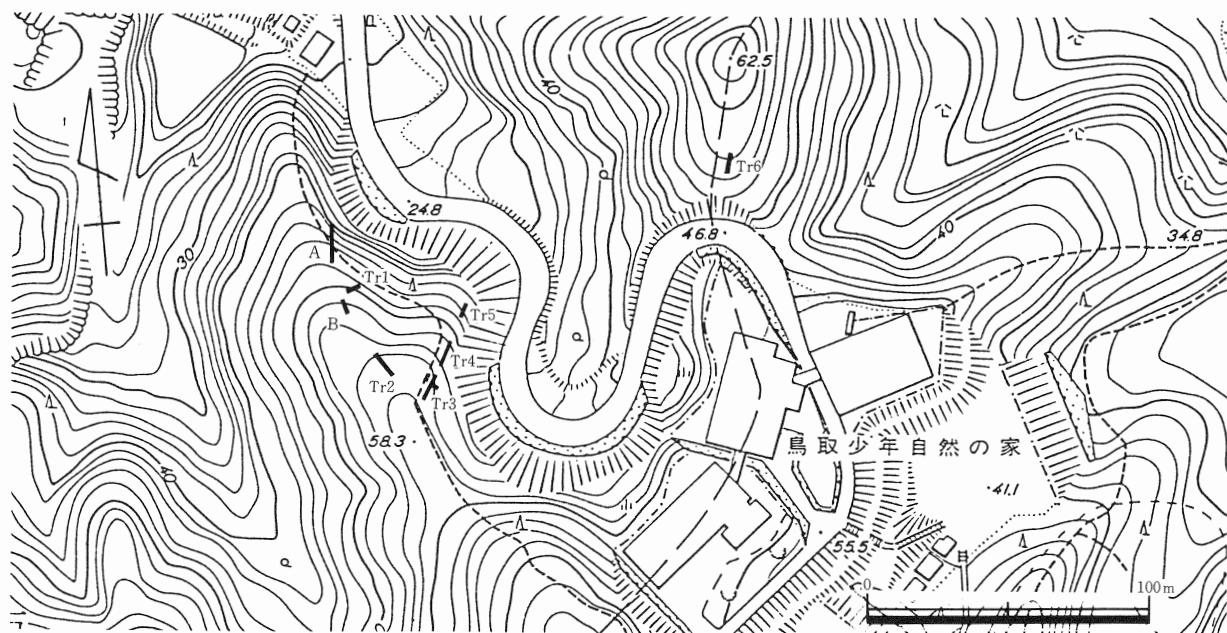
### 2. 発掘調査の概要

調査対象地は、北東に伸びる主稜線から枝状に分岐し北に張り出す支稜線上に位置し、標高42~58mを測る。桂見墳墓群、倉見古墳群中に含まれ、踏査等から古墳が存在する可能性があるとされてきた地域である。このため、調査は周溝等の遺構の確認に主眼をおいて現地形の変換点などを目安に計6本のトレントを設定し、既に道によって削平されている部分についてはその断面精査により土層の観察を行った。なお、各トレント実測図に記したレベルラインは任意杭A、Bを基準としている。

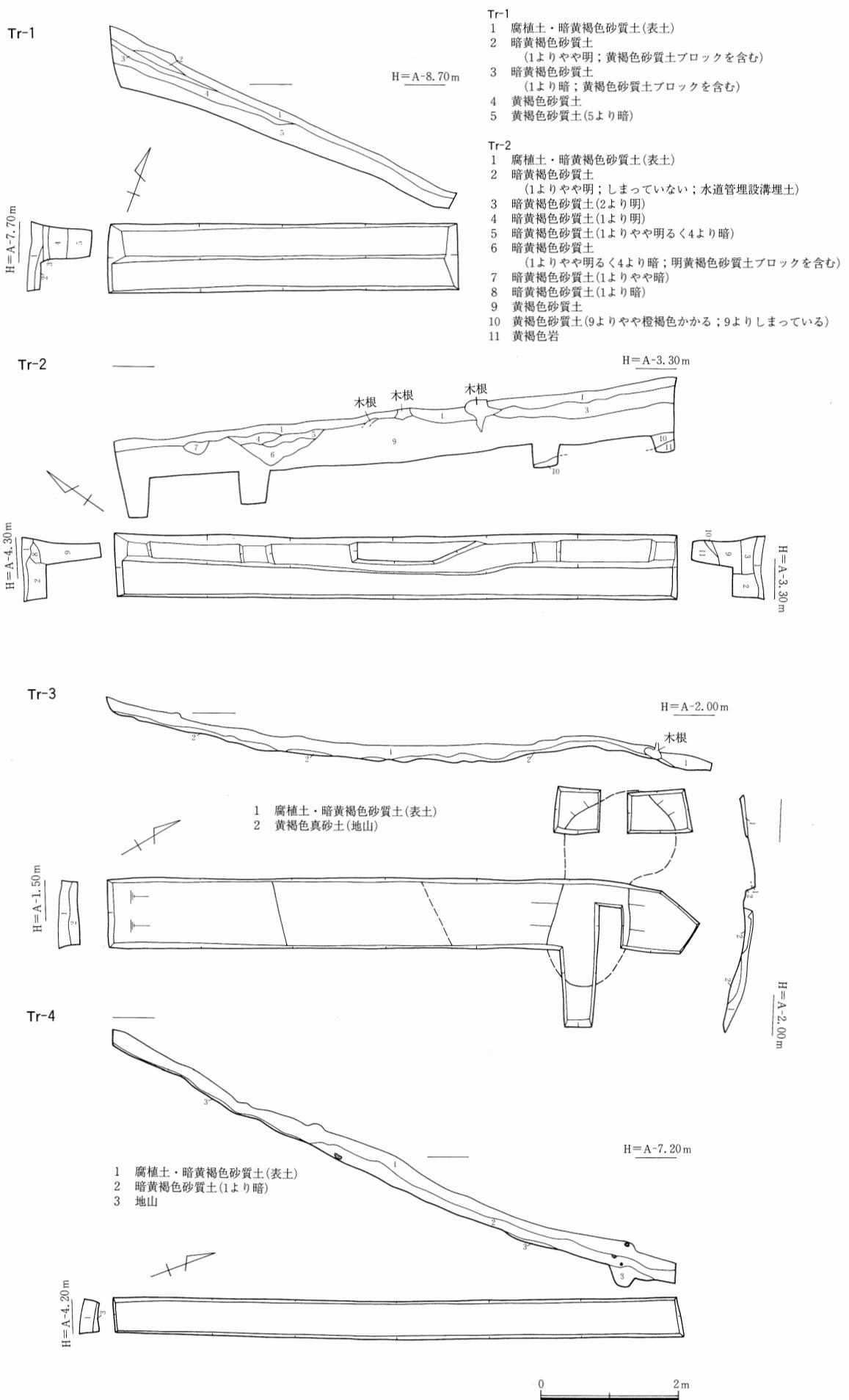
**第1トレント (Tr-1)** 古墳の墳裾検出を目的として、調査対象地の北部、標高50m前後に尾根主軸に対してほぼ直交するように設定した5×1mのトレントである。調査の結果、墳裾カット等の明瞭な土層変化、遺構の存在は認められなかった。遺物も検出されなかった。

**第2トレント (Tr-2)** 現況地形から古墳の可能性があり周溝検出を目的として尾根主軸に沿って設定した8.1×0.9mのトレントである。調査前の標高は57m前後を測る。調査の結果、断面V字形の落ち込み（第4~5層）が認められたが木ノ根の搅乱とみられ、トレント中央部に水道管と思われる鉛管が縦断する。明瞭な遺構と認められるものはなく遺物も検出しなかった。

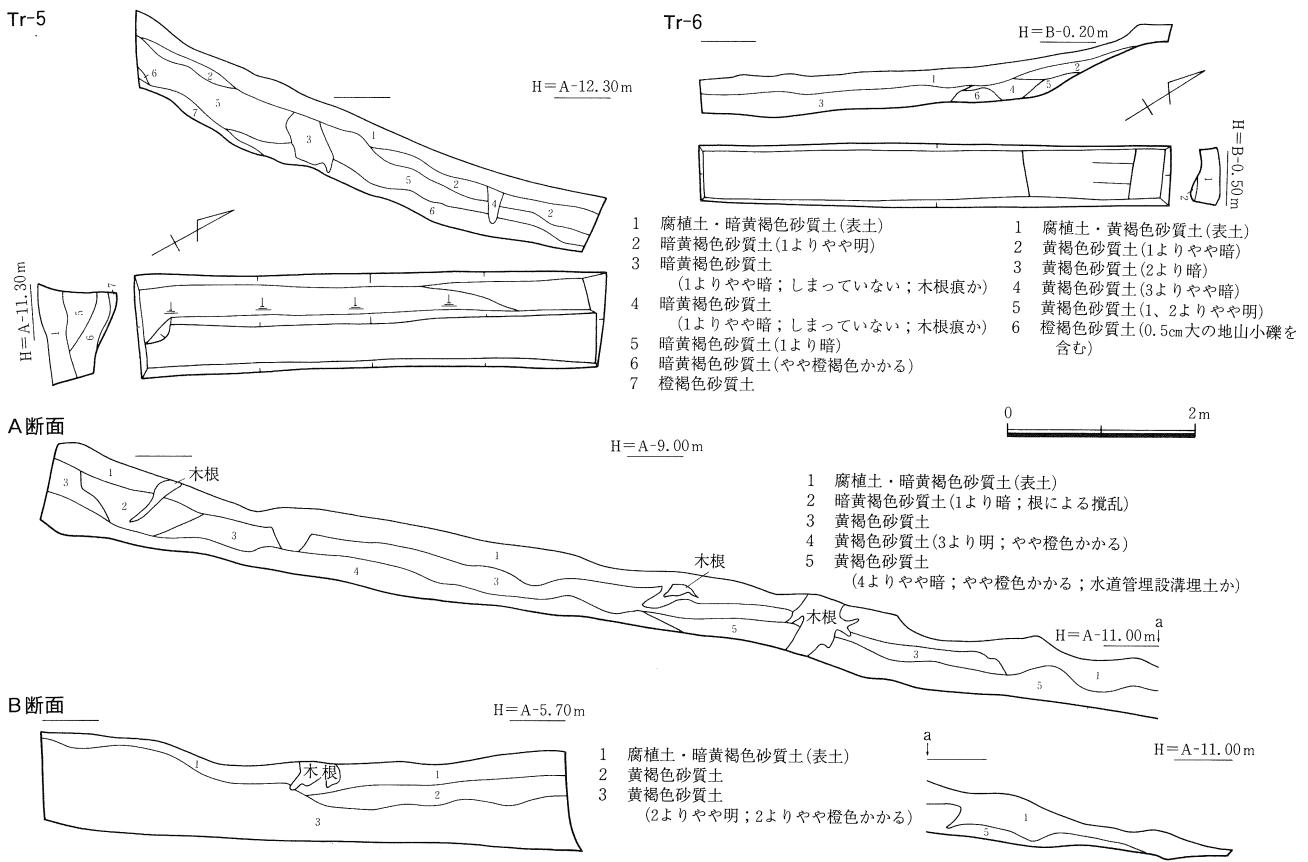
**第3トレント (Tr-3)** 現地形から2基の古墳の周溝を目的として、北へ伸びる稜線から北東へ張り出



第26図 桂見遺跡群トレント配置図



第27図 桂見遺跡群第1、第2、第3、第4トレンチ実測図



第28図 桂見遺跡群第5、第6トレンチ、A断面、B断面実測図

す尾根上に当初  $8 \times 1$  mで設定したトレンチである。調査前の標高は57m前後を測り、最終的に不明瞭部分の確認のため拡張して計 $21\text{m}^2$ のトレンチとなった。調査の結果、表土下は直ちに地山面となり明瞭な遺構は検出されなかった。遺物も出土しなかった。

**第4トレンチ (Tr-4)** 第3トレンチの北東、尾根先端側の微妙な傾斜変換点に設定した $8.2 \times 0.5$  mのトレンチである。調査前の標高は54m前後を測る。調査の結果、明瞭な遺構と認められるものはなく、遺物も検出されなかった。

**第5トレンチ (Tr-5)** 第4トレンチの北東、尾根先端の微妙な傾斜変換点に設定した $5 \times 1$  mのトレンチである。調査前の標高は47m前後を測る。調査の結果、木ノ根の搅乱が一部みられたが、明瞭な遺構と認められるものはなく、遺物も検出されなかった。

**第6トレンチ (Tr-6)** 第1～5トレンチを設定した丘陵とは別の東側に位置する北に伸びる稜線鞍部付近に設定した $5 \times 0.6$  mのトレンチである。調査前の標高は58m前後を測る。調査の結果、明瞭な遺構とみとめられるものはなく、遺物も検出されなかった。

**A断面** 第1～5トレンチを設定した丘陵の先端側に位置し、古墳の周溝、墳裾等の土層変化確認のため、調査以前に山道によって1m程削平されている部分の西側断面を約15mに渡って精査を行った。調査前の標高は47m前後を測る。調査の結果、木ノ根等による搅乱以外は順層で、遺構の存在を示す土層変化は認められなかった。遺物も検出されなかった。

**B断面** 第1トレンチと第2トレンチ間に位置し、古墳の周溝、墳裾等の土層変化確認のため、調査以前に山道によって1m程削平されている部分の西側断面を5.7mに渡って精査を行った。調査前の標高は53m前後を測る。調査の結果、木ノ根による搅乱以外は順層で、遺構の存在を示す土層変化は認められなかった。遺物も検出されなかった。

## VIII おわりに

### 1. 大柄遺跡

A地区は、地形的に旧河道の氾濫原にあたり、第2トレンチから旧流路が検出された他、第1・2トレンチとともに明瞭な遺構は検出されなかった。微高地に近い第1トレンチでは圃場整備により上部を削平されるが下層の標高7.6~8m付近で二次堆積とみられる縄文時代晚期の土器が狭い範囲ながら高密度で出土している。比較的大きな破片が多く磨滅もあまりみられないことから近くに縄文時代の遺構の存在を示唆する遺物として、またこれまで大柄遺跡で出土している縄文土器はわずかな表採遺物であることから遺跡の始源等を考える上で貴重な資料提示となり、周辺は今後も注意を払っていく必要がある。

B地区は、第3・4トレンチは地形的に旧河道の氾濫原にあたり、旧河道とみられる砂利層から非常に磨滅した弥生時代中期~古墳時代前期土器片が出土したが遺構の存在は考え難い。丘陵地に近い第5トレンチで微高地へ続く傾斜が確認できたが圃場整備で削平されており、搅乱土から弥生時代中期~古墳時代前期土器、陶磁器片等が出土していること、縄文土器を出土した第1トレンチと同様な層の堆積が認められたこと等から第5トレンチ西側の地域では今後も注意を払っていく必要がある。

### 2. 中ノ茶屋遺跡

第1トレンチで近現代の遺構や遺物を検出したが、第2・3トレンチでは遺構は認められなかった。第3トレンチから土器細片と土錐が出土しているが混入遺物の可能性が大きい。中世末~近世にかけて砂丘活動が活発で砂の堆積はかなりの量であったと推測されている。今回の調査では多量の湧水のため標高2m以下については掘り下げできなかったが、下層に飛砂活動が停滞した時期の遺構の存在を否定はできない。特に県道を中心とした小高くなった一帯については注意を要するものと思われる。

### 3. 松原谷田遺跡

現況で台地となっている建物の敷地西側を中心として多量の盛土がなされ、各トレンチで造成以前の旧地形の段(畑として利用)が確認された。第2トレンチでは削平を受けた地山面で土師器や須恵器細片と共に複雑に切り合う遺構が検出されたが、それ以外のトレンチで明瞭な遺構は認められなかった。第2・4トレンチ間の東側および第4トレンチの旧地形の上段北側一帯が遺跡遺存の範囲と考えられる。

### 4. 円護寺遺跡群

平野および谷部にあたる第4~6・16トレンチでは、わずかに弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器等を含む谷筋の堆積層が確認され、明瞭な遺構と認められるものは検出されなかった。久松山から北へ下る丘陵延長上の微高地に位置する第1~3、11~15トレンチでは遺構が検出されている。特に第1・2トレンチでは一部古墳時代中後期、奈良時代、中世とみられる多数の遺構が検出されている。現況では段々になった水田あるいは畑として利用されており、特に第3・11~15トレンチでは上部をかなり削平されており、当該時期の遺構とみられるものの一部がわずかに遺存するに過ぎない。ただ第11トレンチ付近はやや主稜線から外れ遺構もそれなりに遺存している可能性がある。

丘陵地では、第10トレンチを除いて第7~9トレンチでそれぞれ周溝および周溝状の土層変化が確認され、古墳3基が存在するものと考えられる。

### 5. 服部古墳群

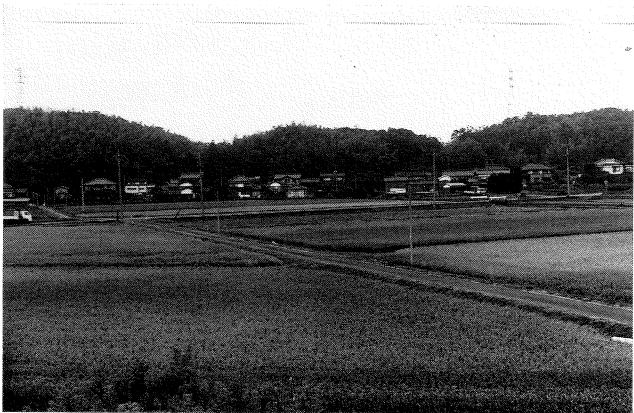
第1トレンチでは明確に古墳と断定するのは困難であるが、まとまった須恵器片の出土から何らかの古墳時代の遺構が存在する可能性が極めて高い。古墳単位ではなく平面的な調査が必要と思われる。第2トレンチでは周溝状の土層変化が確認され土師器片の出土等、2基の古墳が存在すると考えられる。

### 6. 桂見遺跡群

いずれのトレンチも遺構を明瞭に示す証左は得られず、遺物も出土しなかった。第3トレンチの地形変化も自然崩落・流出等によって尾根上に残丘となり古墳状に隆起した状態で遺存したものと思われ、古墳とは判断し難い。しかし遺構が存在しないと断定することも困難で、立会等の措置は必要と考える。

# 写 真 図 版

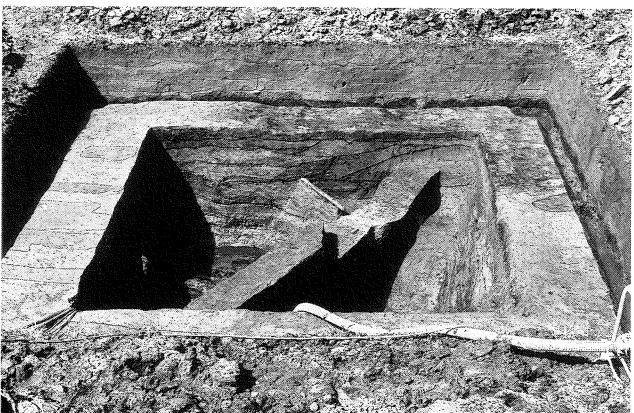
図版 1



1. 大柄遺跡 調査地遠景（南東から）



2. 同 第1トレンチ（東から）



3. 同 第2トレンチ（南から）



4. 同 第3トレンチ（北東から）



5. 同 第4トレンチ（南東から）



6. 同 第5トレンチ（南西から）



7. 中ノ茶屋遺跡 調査地近景（南西から）



8. 同 第1トレンチ（北から）



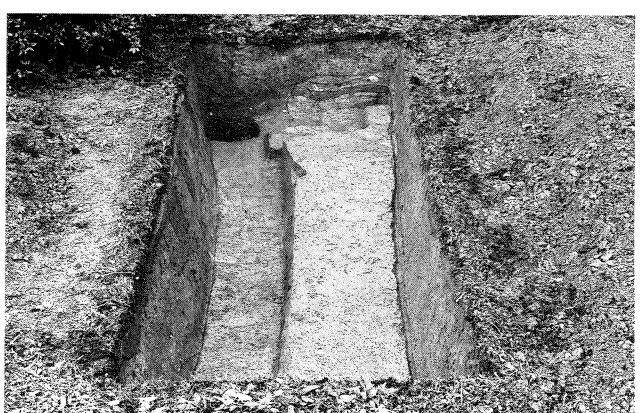
1. 中ノ茶屋遺跡 第2トレンチ（北から）



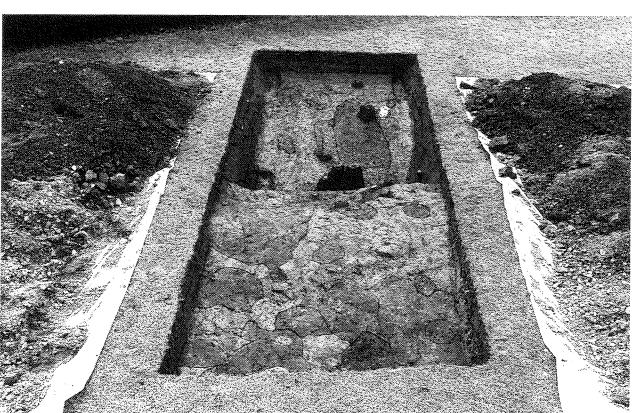
2. 同 第3トレンチ（南東から）



3. 松原谷田遺跡 調査地遠景（南西から）



4. 同 第1トレンチ（南東から）



5. 同 第2トレンチ（北東から）



6. 同 第3トレンチ（南から）

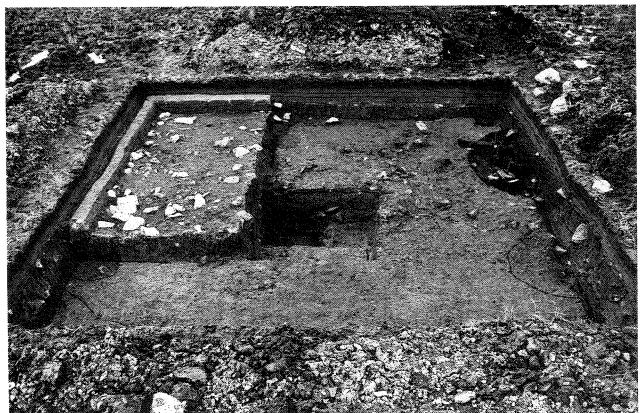


7. 同 第4トレンチ（北西から）

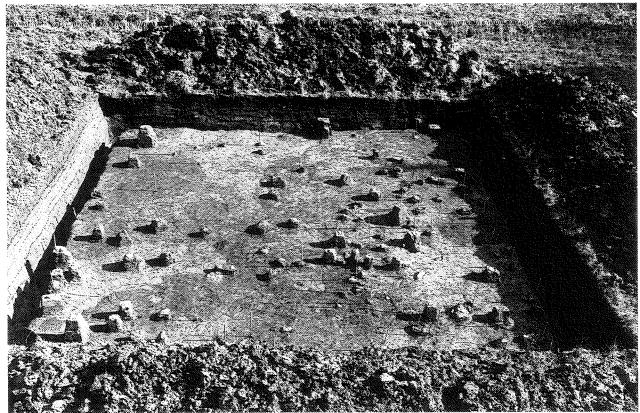


8. 円護寺遺跡群 調査地遠景（南東から）

図版 3



1. 円護寺遺跡群 第1トレンチ（西から）



2. 同 第2トレンチ（西から）



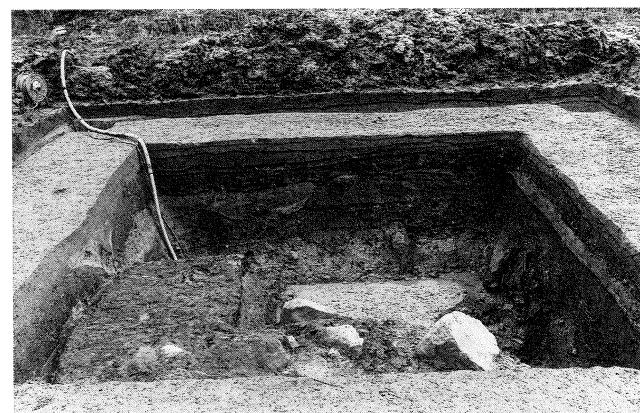
3. 同 第3トレンチ壁断面（南東から）



4. 同 第4トレンチ（北西から）



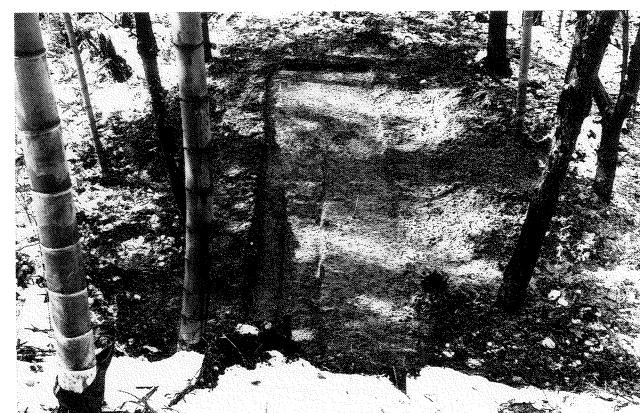
5. 同 第5トレンチ（北東から）



6. 同 第6トレンチ壁断面（南西から）



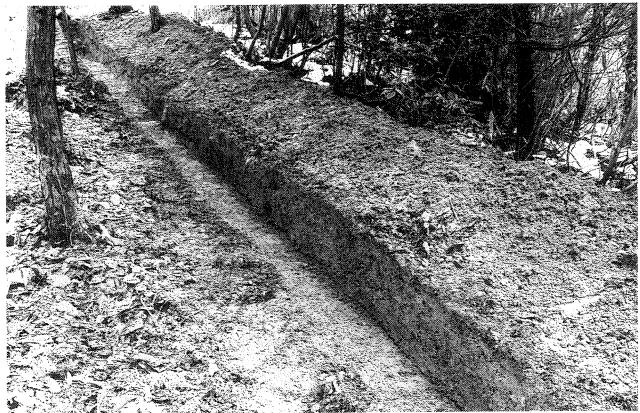
7. 同 第7トレンチ壁断面（西から）



8. 同 第8トレンチ（北東から）



1. 円護寺遺跡群 第9トレンチ壁断面(北西から)



2. 同 第10トレンチ壁断面 (南西から)



3. 同 第11トレンチ (南西から)



4. 同 第12トレンチ (北西から)



5. 同 第13トレンチ (南東から)



6. 同 第14トレンチ (南西から)

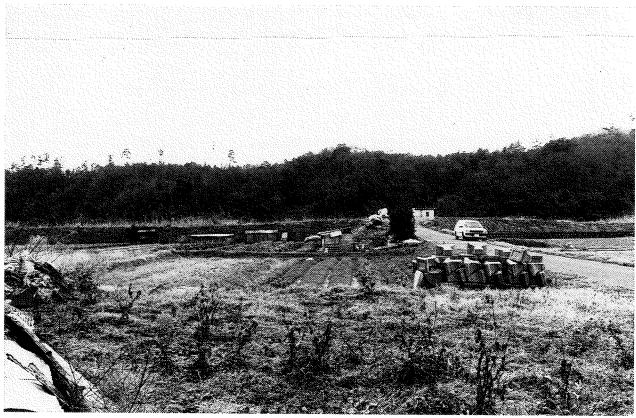


7. 同 第15トレンチ (南東から)



8. 同 第16トレンチ壁断面 (北東から)

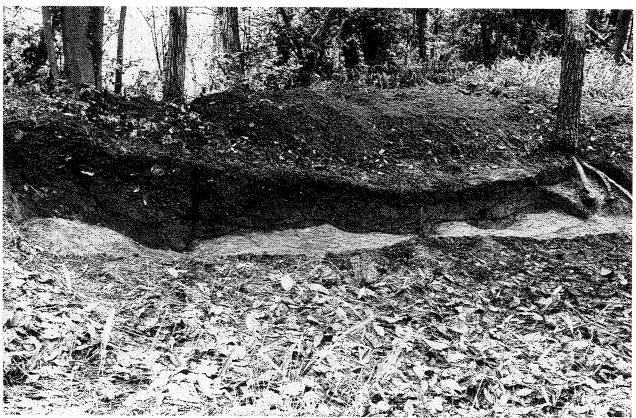
## 図版 5



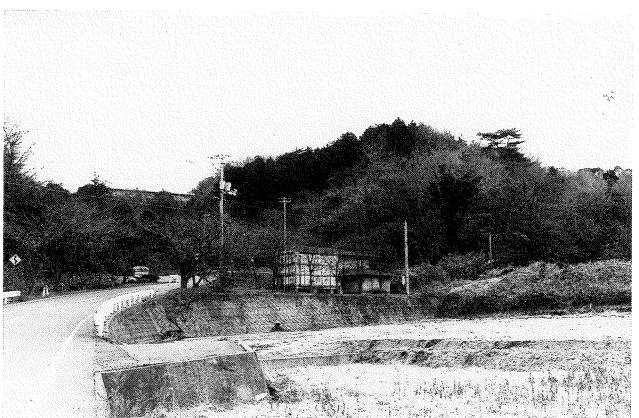
1. 服部古墳群 調査地遠景（北から）



2. 同 第1トレンチ壁断面（南東から）



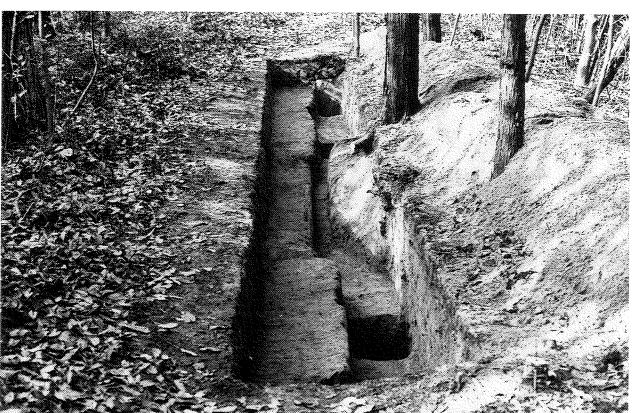
3. 同 第2トレンチ壁断面（南西から）



4. 桂見遺跡群 調査地遠景（北から）



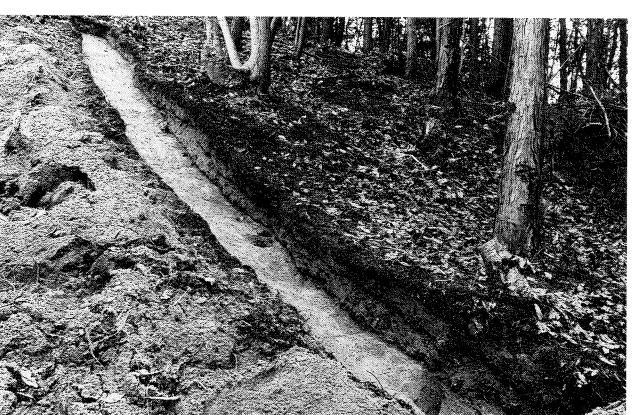
5. 同 第1トレンチ（南西から）



6. 同 第2トレンチ（南東から）



7. 同 第3トレンチ〔部分〕（南東から）



8. 同 第4トレンチ壁断面（北東から）

図版 6



1. 桂見遺跡群 第5トレンチ壁断面(北東から)



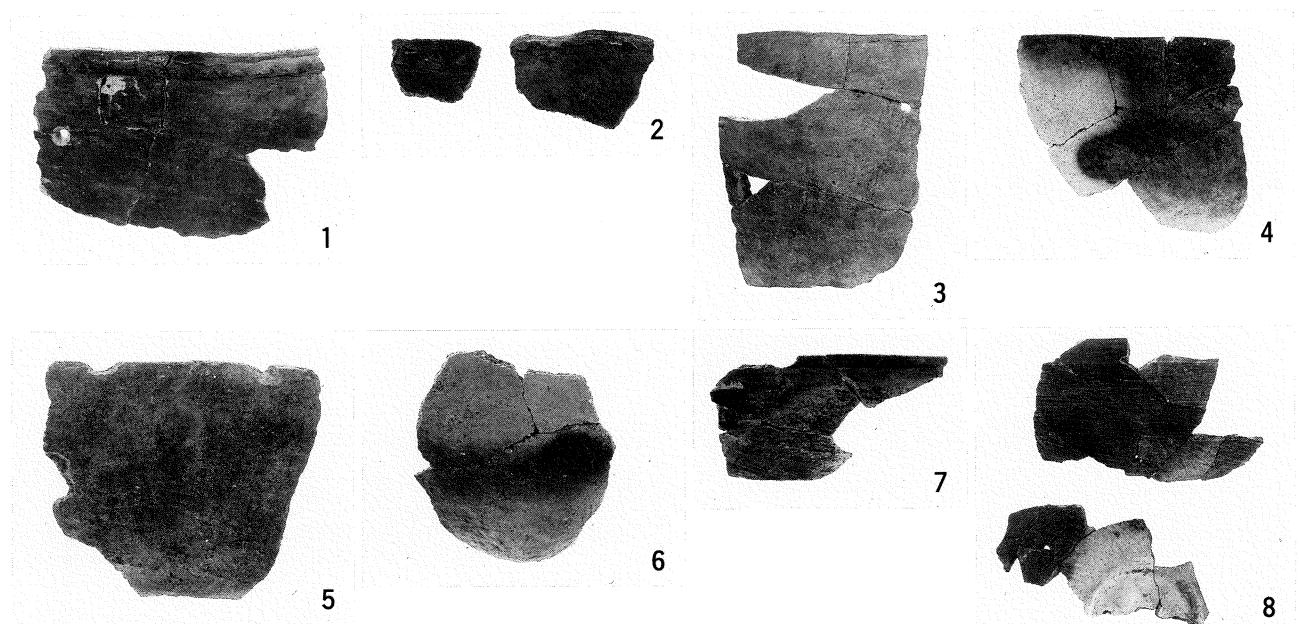
2. 同 第6トレンチ壁断面(南東から)



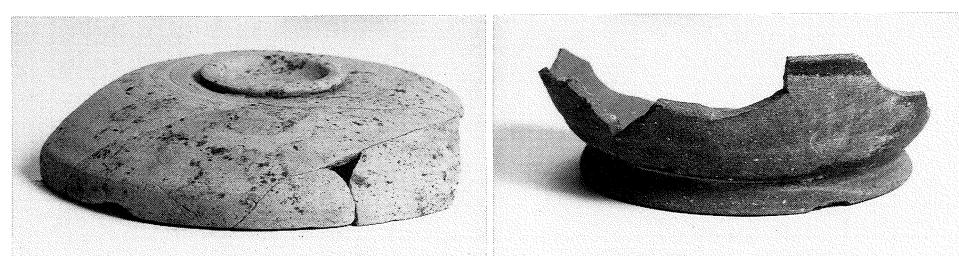
3. 同 A断面〔部分〕(南東から)



4. 同 B断面(南東から)



5. 大柄遺跡 第1トレンチ出土遺物



6. 円護寺遺跡群  
第1トレンチ  
SK-01出土遺物

# 報 告 書 抄 錄

ふりがな	へいせいきゅうねndo とつとりしないiせkiはつくつちょうsaがいようほうこくsho							
書名	平成9年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書							
副書名	大楠遺跡・中ノ茶屋遺跡・松原谷田遺跡・円護寺遺跡群・服部古墳群・桂見遺跡群							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山田真宏 谷口恭子 平川誠							
編集機関	鳥取市教育委員会							
所在地	〒680-0047 鳥取県鳥取市上魚町39 TEL 0857-22-8111(代)							
発行年月日	西暦1998年 3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大 楠	鳥取市大楠	31201		35° 29' 18"	134° 11' 6"	19970904 ~ 19970930	129.4	上水道タンク建設 福祉施設建設
中ノ茶屋	鳥取市伏野	31201		35° 31' 18"	134° 9' 8"	19971001 ~ 19971015	75.0	福祉施設建設
松原谷田	鳥取市松原	31201		35° 29' 21"	134° 8' 16"	19971117 ~ 19971201	36.6	保養施設拡張
円護寺	鳥取市円護寺	31201		35° 30' 46"	134° 14' 39"	19971208 ~ 19980227	275.0	道路整備
服部	鳥取市服部	31201		35° 28' 30"	134° 12' 0"	19980205 ~ 19980206	14.6	道路建設
桂見	鳥取市桂見	31201		35° 29' 38"	134° 10' 14"	19980210 ~ 19980219	33.7	道路整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大 楠	集落	縄文～古墳 中近世	旧流路	縄文土器 弥生土器、土師器		試掘調査として実施 縄文土器出土		
中ノ茶屋	集落	近現代	溝状遺構 ピット	土師器、陶磁器 土錘		試掘調査として実施		
松原谷田	集落	古墳、中近世	土坑 ピット	土師器、須恵器 陶磁器、土錘		試掘調査として実施		
円護寺	集落 古墳	古墳～奈良 中近世	土坑、ピット 溝状遺構	土師器、須恵器 瓦質土器、陶磁器		試掘調査として実施		
服部	古墳	古墳	溝状遺構	土師器、須恵器		試掘調査として実施		
桂見	古墳	古墳				試掘調査として実施		

---

平成9年度  
鳥取市内遺跡発掘調査報告書

平成10年3月 印刷・発行

編集・発行 烏取市教育委員会  
印刷所 株式会社 矢谷印刷所

---